



小説西寺物語



空海の東寺栄え、東寺西寺
を建造した西寺守敏僧都滅
びる歴史秘話

音川伊奈利

まだ官営の西寺造成工事は始まったばかりだった。西寺造成の最高責任者の造寺司は奈良仏教の東大寺の別当で岩瀨寺の住職の権操(ごんそう)で西寺完成時の僧侶の配置や塔頭寺院30寺の宗派、住職の配置の別当職も兼務で西寺建立工事から奈良仏教宗派の選別まで権限のすべてを権操は桓武天皇から命じられていた。

この西寺造成工事は完成までに工程表では約30年はかかると見積もられ西寺敷地内に岩瀨寺八条別院が建てられ僧侶50名との長い共同生活が始まった。権操は桓武天皇から造寺司を命じられたことで奈良仏教六宗派の代表僧侶となっていた。そうすると自坊の岩瀨寺住職、東大寺の別当、南都七大寺代表宗議員など兼務のために月の半分は奈良に帰らなければならない。そこで権操のこの当時の一番弟子の守敏(しゅびん)を西寺建立工事の副造寺司にしたいと桓武天皇に申し入れてそれが認定されたと同時に守敏に従七位の位を授けていた。そして朝廷も認める岩瀨寺八条別院の住職になった。

八条別院は西寺境内の北門を入った西側にあり、門の北側の通りは八条大路でこの通りから北は西七条村で見渡す限りの水田が広がっていた。この西七条村の農民の多くは平城京からの移住者で平城京から長岡京への遷都の最に長岡京は仮の都だと知っていたのか、長岡京は耕す農地がないということからか、農民たちは平安京遷都宣言前からこの土地を我先にと開墾していた。

この農民たちも平城京では村々にお寺を誘致して村民の手で寺を建てていたので寺への信仰心と土木、建設工事はお手のものだった。平城京の農民のすべては南都六宗派の末寺の檀家だったが、この平安京には奈良系の末寺の洛中への進出は朝廷はまだ認めていなかった。そこに奈良のお寺である守敏の岩瀨寺八条別院が出来たために奈良系の農民や長岡京の平城京から移民してきた職人、工人、商人までもが八条別院の檀家になっていた。

西寺の南大門の前の通りは九条大路で羅城門から東には同じ官営東寺の造成地があった。この九条大路から南も水田、田畑が見渡す限り広がって集落の名前は九条村という。この九条村の農民の半分は奈良からの移民開墾者、半分は京都南部深草や藤森からの開墾者になっていた。当時の奈良仏教からすると最澄の天台宗や空海の真言宗も新興宗教にしかならなかったが、新しい都で最澄も空海も布教活動に並々ならない力を入れていた。

当然ながら元奈良の農民は守敏の側につくが、地元の農民は空海を支持して村は真っ二つに割

れて大論争になっていた。これが守敏と空海の最初の因縁になっていた。この争いは朝廷内部でも大問題になり桓武天皇の耳にも入っている。天皇にすれば官寺でもある西寺と東寺が醜い争いをしていても国のためにはならないと名采配をしていた。それは

「西寺の守り神は松尾神社になる、東寺の守り神は稲荷神社になる。西七条村は松尾神社の管轄地であるからして守敏の寺になる。九条村は稲荷神社の管轄地にあるからして空海の寺になる」と裁かれていた。この裁きの後に九条村最初の寺が村民の手で建立されて「九常寺」と命名されて空海の弟子が住職になっていた。この当時は守敏30歳、空海22歳で共に妻子はなく独身であった。

西寺南大門の真正面に九条村の村長でもある常吉という大農家があった。常吉は長岡京遷都と同時に長岡京には見向きもしないで平安京予定地の洛中と洛外との境目の九条大路の南側の荒れ地を長岡京朝廷の許可をもらって開墾していた。それが大当たりしてたった10年で九条村の村民をまとめ挙げると共に朝廷への年貢を集める公的役目も命じられていた。

その常吉には「お種」という色白美人で九条小町と噂される娘がいた。そして高級貴族からも嫁にしたいという申し入れが殺到していたが、常吉はいずれ官寺の官主になると噂されていた守敏の妻にしようと考ええていた。ところが皮肉にも空海もお種に一目惚れしていた、一方のお種も九常寺の落慶法要での空海の凛々しい御姿に一目惚れしていた。だからこそ二人の将来を見越して九条村の寺の名前に常吉の常を入れていたと空海は常吉に訴えていた、さらに空海は常吉に、

「そもそも九常寺の檀家総代でもあるのに関わらず、その娘を他宗派の守敏に嫁がすことは正道に反する」というのが空海の言い分であった。

これも村を二分する大論争になり朝廷にも届いていたが、桓武天皇は、「守敏は従七位、空海は無位になる」だけを左大臣に告げていた。つまり、天皇は弱くなっているがまだまだ奈良仏教は力があり奈良仏教僧兵1000名と比叡山僧兵1000名との宗教戦争を避けるという理由で守敏の顔を立てる采配と空海は理解はしたが、この屈辱は一生忘れないと思うばかりか宗教界のみならず天下を取ると強く誓っていた。

(この小説を書き始めたきっかけは史跡西寺跡遺跡調査発表会に参加したが、この参加者の多さにビックリ仰天して「そうだ!、西寺をテーマにした小説を書こう」と思いとりあえずこれだけ書いてみました。)

西寺跡発掘調査

世界遺産の東寺と同じ規模の西寺跡を見て来ました。コンド山の下が掘られて講堂の礎石が...その近くには五重塔の遺跡も...土の中から一千年のロマンが目の前に...。ワタシの小説でも東寺は稲荷神社、西寺は松尾神社が深く関わると書いたが、それを証明された気分になりました。画像

は講堂跡、五重塔跡、コンド山の金堂の礎石

小説 西寺物語 2話 九条葱が西寺を救った

守敏の氏は橘氏で俗名は敏光、768年3月2日綴喜郡井手村梅宮神社宮司橘広光の三男として生まれた。この梅宮神社は橘家ゆかりの神社で東大寺にも縁があり守敏15歳の時に東大寺別当だった権操の弟子となっていた。権操の自坊は岩瀨寺で守敏はここで15年の修行の後に桓武天皇から官営西寺造寺司を命じられた権操僧正とともに西寺建立の最高責任者になっていた。

空海は布教と空海ゆかりの寺の建立をと都の洛中や洛外の新しく出来た集落を勢力的に訪れていたが、この九条村での布教に成功して九常寺を建立して農民85世帯を天台宗の信者にした。これはいずれ空海が立ち上げる真言宗の布石第一号の寺になるに間違いはないと思っていた。

さらにこれは奈良仏教の守敏から寺を一つ勝ち取ったことになるが、空海としては初恋の君である常吉の娘の「お種」を反対に守敏に取られたことになる。この神も仏の情もない無常な仕打ちに打ちのめされて空海は比叡山を下りて布教と修行の全国行脚の旅に出ている。しかしながら、もしこの時に空海はお種を手に入れて入れれば九常寺の住職となりお種との甘い新婚生活に甘んじていたかも知れない。そうなればその後の遣唐使派遣、官営東寺官主、弘法大師拜命などの輝かしい栄光の歴史はこの九条村で立ち消えていたかも知れない。

西寺造成地に各伽藍の予定区画を示す杭が打たれ縄を張る作業が続いていた。図面に依ると南大門と金堂前広場の五重塔の反対東側に西寺を守る松尾神社、東寺を守る稲荷神社の社殿の建設予定地が並んであった。南側の稲荷神社の敷地にはもう整地がされて社殿の資材である根石や礎石、それに木材が各地から運ばれて山積みになっていた。一方、北側の松尾神社の敷地はまだ手付かずで水溜まりが出来ている。

守敏はこのことだけを見ても地域密着の稲荷神社の財力と労役動員力が分かる。ましてや本体の東寺の工事もこれと同じで西寺よりは大幅に進捗していた。その稲荷神社の予定地に青い長い茎の先に白くて丸い花のような物が付いた植物を発見していた。守敏はこれが青葱(日本固有の青太葱)だということを知っていた。守敏がまだ岩瀨寺の修行時代に布教で訪れていた浪花難波村の農民からこの葱と鴨の肉で煮た鴨鍋をご馳走になっていたからだ。この葱は稲刈りが終わったあぜ道に自生して真冬でも枯れなかった。難波村の農民はほしかったらいつでも手に入るから栽培してこなかった、ましてやこんな物を栽培しても売れないと思われて世の中には広がらなかった。

守敏はすぐに九条村長の常吉や農民を岩瀨寺に集めてこの葱を栽培するように指導していた。稲の刈り取りの後は年貢の他に15歳以上の成人男子には公共土木工事の労役が待っていた。この

労役は年に60日と決まっているが、台風や大雨などで災害発生時はさらに30日を追加される場合の年もあった。この葱の栽培は男子が労役期間中であっても女、子供でも簡単に栽培する利点もあったので常吉もすべての村民に葱の栽培を命じていた。

この葱の種は稲荷神社の敷地から発見されたが、葱の種が土木資材などと一緒にどこからか運ばれて来たのは稲荷大明神の御利益の葱であるとして稲荷信仰に拍車がかかり西寺境内にある稲荷神社を「九条葱稲荷大明神」として九条村の村社としていた。またこの葱を発見した守敏に対して感謝を表すために西寺の建設工事に年に30日の労役奉仕をすることを村民すべて一致で決めていた。これは九条村は稲荷神社の氏子のために公共労役60日は東寺の造営工事に参加しなければならないが、さらに30日もの労役は半端ではなく守敏への信頼が厚いことが分かる。この労役によって大幅に遅れていた工事も順調に進捗していた。

★～3話は守敏が西七条村に芹(セリ)を指導して広めた... 1話は↓をクリックしてください。

[小説「西寺物語」 1話 守敏と空海の因縁の争い・西寺跡発掘調査・女装小説家 オカマのイナコ](#)

小説西寺物語 3話守敏、芹と葱で大僧正に!

守敏が九条村の農民から信頼が厚い理由は他にもあった。それは村長の常吉の娘「お種」を守敏が妻にしていた経緯がある。この当時の奈良仏教は妻を娶ることは建前ではできなかったので守敏の自坊の岩瀧寺八条別院での同居はできなかった。そのためにお種の部屋は常吉の屋敷内に離れとして建てられ守敏が夜な夜な通うという通い婚になっていた。

やがて、お種が身ごもり可愛い女の娘が無事産まれてきた、その娘は「真子」と命名されていた。この当時には守敏は奈良仏教を代表する守敏ではなく京の都を代表する有名人気僧侶になっていた。この先、同じ官営の東寺と西寺があるが、西寺の方が格上で守敏も従七位の官位があるからこそ貴族からも信頼を得ていた。そうなればこの真子はいずれ朝廷から官女、侍女とお呼びがかかり最低でも高級貴族の正妻に、これが運よく天皇の目に止まり天皇の王子を妊娠すれば真子は皇太子の母、そして天皇の母にもなる大きな夢を守敏も常吉も九条村のすべてが抱いていた。

九条村に九条葱の栽培を指導した守敏は岩瀧寺の檀家でもあり、また西寺建設工事に労役の協力をしてくれている西七条村にもなにか恩返しの農業指導を考えていた。この西七条村は元々湿地帯で沼も多く村中どこを掘っても水が湧き出していた。水田には最適の土地だが、少し雨が降ると田畑が水没して九条葱には適していなかった。

そこで守敏は修行をしていた岩瀧寺境内の小川に自生していた芹を思い出して弟子3名にその芹の苗や種を持ち帰るように命じていた。この芹は奈良仏教がまだ栄えていたころ奈良の僧侶数名が遣唐使に派遣されていたが、その時に種を持ち帰っていた。その種から芹を奈良の農民が栽培を試したが、奈良の土が合わなかったのか栽培されずに忘れられてもう10年が経っていた。

守敏はその後寺の前の小川で自生している芹を発見してこの芹は水の中で育つ植物だと思いながらも奈良の農民に教える機会もなく忘れていた。この芹の種と苗が来たと同時に守敏は西七条村の農民を岩瀧寺八条別院に集めて芹の栽培を指導していた。農民らは九条村の葱の栽培の成功と高値で取引されるのを嫉妬と妬みで時には九条村への農水路の水を意地悪から止めたこともあった。この芹の栽培が見事に成功したことへの感謝として西七条村の農民の西寺建設工事の公的労役60日の他に30日の自主労役を守敏に申し入れていた。

守敏が西寺建造の副造寺司に赴任してから5年経っている。もう35歳になっていたが、貴族の橘氏の血を引くのか色白の細面の公家顔で背丈も五尺九寸と長身だが細身で法衣を着て歩く姿は凛々しく守敏を一目見ようと朝早くからお参りの女子は農民の娘から貴族の嫁まで日の入りまで絶

えなかった。京の都も長岡京から公家、貴族はもちろん商人や職人まで都への引越しは終わり都の人工は10万人を超えていた。

守敏とお種の間にも生まれた「真子」も元気に育っていたが、その後、お種には子供が授からなかった。そこで西七条村の村長で岩瀨寺八条別院の檀家総代でもある留吉はお種が子供を産めないなら側女をと進言してきた。守敏は奈良仏教の教えからしてその様なことは出来ない丁寧で断っていたが、留吉は、

「でもね～守敏さま、西寺が完成するまでに30年とも50年とも言われています。守敏さま一代では到底無理で寺を完成させるにはどうしても守敏さまの血筋の男子が必要になります。もし男子ができなかったらこの寺の後目を狙って奈良仏教はもちろん、比叡山も横槍を必ず入れて来るのは目に見えています。そうなれば京の都は奈良仏教と比叡山の宗教戦争が起こり西寺も東寺も焼かれてしまいます。我々西七条村も九条村もこれから先西寺が完成するまでの工事を孫子の代まで引き継ぐ決意ですが、是非、側女を...なんならお好きな娘を5人でも20人でも男子が数名生まれるまでお世話させていただきます」

守敏はこの話しにいい返事はしなかったが、村長の留吉と松尾神社宮司の酒公と共謀して西寺西門から北へ三町(約360メートル)の場所に松尾神社の西七条御旅所の社殿を造り、その敷地に守敏専用の屋敷を作っていた。その屋敷には留吉の孫娘でまだ15歳の「清子」を行儀見習いという名目で守敏の側女として置いていた。この当時の成人とは男女とも15歳であったからこれはこれでなにも問題はなかった。

守敏にすればこの西寺建立に命を賭けていたので西七条村民の89世帯成人男子221名、九条村民78世帯成人男子168名の自主労役30日、1年間述べ11670名の労働力を失うことができなかった。やがて守敏が清子に足しげく通う姿に村民は安堵していたが、その後、1年が経っても清子は守敏の子供を身ごもらなかった。その話しは西七条村民や九条村村民ばかりか朱雀大路に店を構える油問屋、米問屋などの大商人までが娘や孫娘を守敏のお世話側女に置いほしいとの話しが次から次へと舞い込んできた。

このころの守敏は西寺の「完成にはどうしても男子の後取りが必要」だと側近からしつこいほどの暗示をかけられていたのでその申し入れのほとんどを受け入れていた。このお陰で今まで岩瀨寺の檀家のすべてが農民の檀家だったが、娘や孫娘を差し出した宮廷御用達の大商人も競って檀家になっていた。さらに西寺建立のために木材や瓦までが寄進されたので守敏は奈良仏教の代表から都を守る国営西寺、東寺両寺の代表造寺司従七位大僧正の地位を確立していた。

小説西寺物語 4話 稲荷神社のお告げで長岡京遷都決定

守敏が西寺副造寺司に桓武天皇から任命されたのは796年になるが、これより10～20年前の平城京での奈良仏教の権力と利権は天皇制をも否定するほど目に余るものがあった。守敏も東大寺の有力末寺の岩淵寺僧侶であったが、宗教とは民衆を守るためにあり、その寺の維持と僧侶の生活のための寺領であって年貢を農民が納めることこそ農民自身を守ることにになると寺領の農民に説法をしていた。

奈良仏教の六宗派などの七大寺院の強引な権利の主張が長年まかり通ってこれらの寺領からの年貢は平城京に全国から納入される米の三割にもなっていた。これはいわば国家予算の三割を奈良仏教が使っていることになる。この財力で坊主の日頃の贅沢な暮らしは公家や貴族と同等になり、僧侶の袈裟や法衣には豪華絢爛な金銀の糸が使われていた。遣唐使が持ち帰った各国の財宝なども東大寺の正倉院に収納されて坊主に私物化されていた。

この利権があるからこそ教義も宗派も違うのに奈良仏教は喧嘩もせずさらに団結力も強化になり、寺領を野武士や山賊から守るためという名目で僧兵1000名を組織していた。この僧兵の武力に怯える公家、貴族は常に東大寺の貴族坊主の顔色を見る日々となっていた。

この奈良仏教の横暴をなんとかしたいと桓武天皇は稲荷神社宮司の伊呂具に密書を送り相談をしていた。この伊呂具は元々朝廷の役人で伊呂具の父親は遣唐使にも派遣されている従六位の秦氏系の学者だった。その父親が奈良仏教の横暴をなんとかしたいと桓武天皇に訴えたことが奈良仏教に漏れて父親は僧兵に殺されてしまった。これで伊呂具一族は奈良から逃亡して深草の地で新興宗教の「稲荷神社」を立ち上げていた。

伊呂具は天皇に返事を書いていた。それは、
「奈良仏教六宗派の目に余る横暴は寺領の農民から寺に納める米の石高の多さであるが、その寺領を取り上げればそれを理由にして朝廷と奈良仏教の戦争になります。奈良仏教の目的は桓武天皇を退位させて奈良仏教のいいままになる天皇を即位させることにつきます。その解決作の一つは農民の多くが自主的に寺領から離れば寺領が多くても米を作る農民がいなくなるので収入源は絶たれます。その農民に広大な未開の土地がある山城盆地(京都盆地)に開拓移民させれば田畑が増えて朝廷への年貢はかなり増えます。一方の奈良仏教は寺領からの年貢が急減して僧兵などを雇用できずに崩壊いたします」という内容だった。

稲荷神社の祈禱師伊呂具からの手紙を読んだ桓武天皇は農民の移住どころか都そのものを山城盆地に遷都すると左大臣、右大臣にもなんら相談もせず独断で決めていた。ただ、当初の都を

予定していた京都盆地はまだ沼や湿地帯で整地するまで10年はかかると見積もられていた。そこで遷都予定地に近い長岡に仮の都を造ると宣言されていた。

この宣言を受けて奈良仏教は桓武天皇がどこに逃げようが、奈良仏教の広大な寺領がある限り権力と利権はあると長岡京への遷都は問題にしていなかった。そして京の都が出来ると同時に奈良六宗派、七大寺院の別院を置けば今まで通りの権力と利権を維持出来ると信じていた。ただ、奈良仏教は桓武天皇に奈良仏教せん滅作戦を進言した稻荷神社祈祷師伊呂具の存在はまだ知られていなかった。

長岡京遷都が正式に決まると平城京の商人や職人までが我先にと長岡京への引越しを始めていた。奈良仏教は寺領の農民らは先祖代々から受け継いだ田畑や家、それに先祖の墓を捨ててまで未開の農地を新たに開拓するとはとても思えず長岡京遷都に対しての農民への監視はまったくしていなかった。

このころの寺領の農民が寺に納める年貢米は米の収穫予定高の六割と決められていたが、この六割というのは米の豊作時の収穫量が基準で固定された年貢になっていた。つまり、豊作時の農民の取り分は四割だが、不作や凶作で米の収穫が半分になったり、台風や水害で稲が全滅しても六割の年貢は次の年に納めなければならない。この不作が二年も続けば農民らは餓死するか、田畑を寺や貴族に売って小作人になるしかなかった。小作人になれば奈良仏教への年貢の六割はそのままに借地料として収穫の二割を取られてたとえ豊作であっても農民は二割の収穫にしかならなかった。

桓武天皇は長岡京遷都に対して全国の農民に次の事柄をお知らせになった。

一、長岡京洛外、平安京予定地洛中、洛外の未開拓地を開墾したものはその開拓田畑はすべて農民個人が耕す権力を有する。

一、年貢米は移民後10年は収穫高の一割、その後は収穫高の三割、労役は成人男子60日にする。労役の任務は主に平安京予定地の造成工事とする。

ただこの天皇の通達は全国の農民らに出されたもので特に奈良仏教の寺領の農民を意識したものでなかったが、そこはそこでこれら天皇の通達を奈良仏教の寺領の農民らに宣伝する部隊が結成されていた。奈良仏教で寺領を一番持っているのが東大寺で長岡京から近い大和国から摂津国だけでも25ヶ村、1250戸の農民から年貢を取っていた。これらの村には東大寺の末寺があるが、この末寺がこれら天皇からの通達など奈良仏教に不利になる事柄のすべてを握りつぶしていたが、農民らは自分が納めている東大寺への年貢(固定六割)が不当だということは他の村の年貢収穫高の四割～五割と比べて知っていた。

この小説へのご意見は、kyotoinari@yahoo.ne.jp まで

小説西寺物語 5話 寺と村落ぐるみ乗っ取り大作戦

東大寺寺領の農民を説得する部隊は比叡山延暦寺の若手の僧侶で髪を伸ばして農民の姿で二人一組で二十五組の工作僧が結成された。それぞれの村には寺もあるが、住職は一人でそれも宗派の出世から外れた坊主で酒一升ほどの手土産で比叡山の坊主とは色々話しをして打ち解けていた。その住職は工作僧に、

「そら～本山の幹部は奈良仏教貴族と云われるほどの贅沢な生活をしているが、我々は本山の命令で農民から容赦のない年貢の取り立てをしているので農民からは敵とされている。豊作の時はまだいいが、不作の時は餓死や病死の遺体が寺に運ばれて私も胸が痛い」という住職が多かった。

これらの情報を比叡山に送るとその返事は、

「これらの住職の命と身分は保証して寺ごと農民を開拓移民にせよ」ということになった。そして農民を寺に集めて桓武天皇からの開拓移民の条件を寺の住職から説明をさせていた。もちろんその二十五の寺は改宗して天台宗の末寺になる。

ただ25ヶ寺のすべてが上手くいくとは限らない、ある摂津国の寺では住職が工作僧の話しを聞くだけ聞いてその深夜に寺を抜け出して東大寺へこの事件の報告に向かったが、その直後工作僧に捕まり、

「ここで死ぬか、それとも京の都で天台宗の寺の住職になって贅沢な暮らしをするか」の返事を今すぐしなさいと大きな体の工作員が太刀を振り上げていた。

この訓練された比叡山の工作僧らは25ヶ寺の住職の説得に成功をしてその寺の僧侶として入り込み住職の監視、また農民を助けるのが寺と坊主の役目という思想教育までしていた。さらに村長など有力村民を寺に招いて桓武天皇からの移民の条件の説明も丁寧にしていた。ただこれらのことは絶対に他の村へは秘密であるが、この秘密結社のような、そしてそれが奇妙な村落運命共同体になり村民すべての団結力になっていた。

二十五ヶ村の村民らはまず村ごと移民する新規農地開拓の下見として農家の三男、四男5名～10名を組織していた。これらは長岡京やいずれ遷都される平安京予定地の地形や池、沼、川などを知りつくした比叡山の工作僧が作った絵地図を寺の本堂に広げて村民らが納得するまで連日連夜議論をしていた。これら下見の予定地が決まると他の村とかわち合わないよう二十五ヶ村の若者たちがお互いに連絡を取るために大和国と摂津国を走り回っていた。

大和国中山村が選んだのが平安京の入口になる羅城門から北十町ほどの湿地帯になるが、絵地

図によると湿地帯の中程にある川に堤防を作れば湿地帯に溜まった水を制御できると判断して中山村の移民下見隊10名は隠密に村を出発していた。(これが後の平安京の西七条村になる)

これら25ヶ村の農地開拓地域は長岡京洛外に3戸、平安京洛外に10戸、洛中に12戸と決まっていた。総数は1250戸約6000名にもなるが、これを受け入れる都の体制も桓武天皇の一声で決まっていた。それは、

「朝廷はこの問題には一切関与をしていない。比叡山と稲荷神社、松尾神社、向日神社が独断でしたことになる」と言われた。

つまり、奈良仏教の末寺は全国で2500寺、比叡山の末寺は125寺で力の差は歴然としていた。ここで奈良仏教を敵に回すと全国からの年貢を奈良が押さえることになるが、こうなると奈良仏教との全面戦争になるのは目に見えている。長岡京遷都が完了するまでは奈良仏教との争いを極力避けるための天皇の名采配だと稲荷神社宮司の伊呂具らは思っていた。

そこで稲荷神社は開拓移民の病人や高齢者、それに未成年の子供らを当面收容するために平安京官営東寺東門予定地の東三町に稲荷神社御旅所を建造することを決めていた。松尾神社も官営西寺北門予定地から北三町に御旅所を建造することを決めていた。向日神社も長岡京洛外の神足村に御旅所を建造することを決めていた。比叡山はこれらの御旅所に味噌や塩、それに野菜が収穫されるまでの食料を支援することを決めていた。それぞれの御旅所の建造工事は平城京から長岡京への遷都のための引越しが始まると同時に開始されていた。

783年の稲の刈り入れが終わり全国から年貢が平城京に集まると同時に農民は公共工事の労役に駆り出される。平安京予定地に隠密に開拓移住を決めていた東大寺寺領の25ヶ村も規定の年貢を村単位で納めている、村にはこの年貢を輸送するために三台～五台の荷車があった。長岡京遷都に対してこの25ヶ村の労役成人男子(約3500名)の仕事は貴族の屋敷を解体して長岡京に輸送することになった。平城京から長岡京へはすべて陸路で牛貨車60台、荷車500台が農民から集められ、それに朝廷が新調した500台で60日の大引越しになる。

これは長岡京遷都引越し作業の一部分で天皇の宮殿は平城京から運ばず旧難波宮(なにわのみや)を解体して淀川の水路(難波津～山崎津)を使って長岡京に輸送していた。本来なら平城京の宮殿をそのまま移転すればいいが、これは奈良仏教が宮殿と公家の屋敷の移転を強烈に反対したためだった。反対の表向きの理由はもし長岡京で大火災が起こった場合のために予備の宮殿が必要というものだが、本当の理由は奈良仏教の都合のいい天皇を手に入れた時に宮殿と公家の屋敷が必要だということだった。ただ、旧難波宮の宮殿と公家の屋敷がそのまま残っているのは奈良仏教がいう万が一のための予備の宮殿になる。

[小説西寺物語 2話 九条葱が西寺を救った](#)

[小説西寺物語 3話 守敏、芹と葱で大僧正に!](#)

[小説西寺物語 4話 稻荷神社のお告げで長岡京遷都決定](#)

この小説のお問合せは、kyotoinari@yafoo.ne.jp まで

小説西寺物語 6話 東大寺権操、守敏長岡京へ抗議の旅

長岡京遷都の大引越し作戦の総責任者は貴族の正四位藤原種継であった。そして種継の子の従七位藤原忠成は平城京の宮殿など建造物以外の国文書や国宝など天皇家、公家の家財道具すべての引越しの責任者となっていた。その忠成が東大寺寺領25ヶ寺の代表村長の伊助、25ヶ寺代表僧侶の貝本、比叡山の工作僧侶の3名を忠成の屋敷に招き入れていた。これらの3名は貴族の屋敷なんてものは初めてでただただひれ伏していた。忠成はこれらの農民が計画している平安京予定地への秘密の開拓移住を知っているのか、忠成は、

「年明けの784年3月1日から東大寺の大法要とお水取りが執り行なわれる。そうすると25ヶ寺の住職も招集されるが、その中の坊主一人でも裏切れば比叡山との宗教戦争になる。さすれば3月1日までに25ヶ寺、農家すべての引越しを終えてほしいが、いかがか？」

この忠成の急な申し入れに3人は顔を見合わせていたが、伊助が、
「25ヶ寺と1250戸の農家のすべてですか？、しかし、2月の中旬まで長岡京遷都の労役があります...」

「なるほど、しかし、中旬から3月1日までは半月もあるが...」

「しかし、各村には荷車が3~4台しかありません、京までは10里片道約15時間はかかります」

「なら、荷車があればいいのか、それなら朝廷の荷車500台を貸し与える」

この忠成の無理な申し入れに3人はただただ「承知しました」と頭を下げるしかなかった。

こうして朝廷からの荷車500台、各村所有の100台で2月15日から平安京予定地への引越し大作戦が決行されていた。各村で一番大きな建物は寺になるが、そもそも使っている材料はまだ末寺では瓦葺屋根ではなく柱と板、それに礎石などの石類、御本尊の仏様だけで寺一つ分は5台も荷車があれば十分足りる。寺の解体や組み立ても何十年もの奈良仏教寺院の労役作業で宮大工級の腕は身につけているのでさほどの時間はかからない。

ましてや農家なんていうものは小屋に等しいもので荷車2台もあれば昨年収穫した食料の米も種籾も農具も積めていた。それでも一つの村は約50戸ほどあり、各村1日に約20台もの隊列を組めば何かと目立つので早朝、深夜と分散した引越しで10日ほどかかっていた。この引越しの前には寺の位置や各農家の敷地や田畑の割当は決まっていたので3月1日の各移民農家の夕方には米を炊く煙が立ち上りこの寺と村が突然現われたと原住民の農民は驚いていた。

同じ784年3月1日から東大寺の大法要とお水取りが始まった。東大寺の末寺は全国に752寺ある、すべての末寺はこれに参加をするのが決まり。平城京に近い25ヶ寺の住職が集団欠席するのは異変事態になるが、なんせ半月も宗教行儀があるので東大寺の別当の権操も守敏も身動きでなか

った。

やがて大法要も終わり権操の一番弟子の守敏にこれら異常事態の調査を命じていた。守敏は20名の僧侶を選び25ヶ寺の調査に乗り出したが、その調査の報告では、

「25ヶ村の寺も農家も墓石だけを残して先月の下旬に平安京予定地に引越しをしたそうです。それぞれの寺領の村に隣接した農民らの話しをまとめますと朝廷から借りた荷車で京の都の農地開拓地まで5～6往復して引越しを完了したそうです」

この報告を聞いた守敏は、

「なに～荷車を朝廷から?、その橋渡しをした貴族は誰だ!」

「そこまでは分かりませんが、長岡京遷都の労役の最終日に各村は荷車を持ち帰りそのまま引越しをしたそうです」

平城京から長岡京への引越しの責任者は藤原忠成だと分かり、権操と守敏と忠成の屋敷に抗議の面会をしていた。権操は、

「東大寺の寺領の農民を集団移民させたのはどういう意味があるのか?」

「さて、私にはそのような話しには一切関与していない」

「なら、東大寺寺領の農民に朝廷の荷車を貸し与えたのは?」

「それは大僧正もご存知の通り、桓武天皇が全国の農民に平安京造成地の労役のための未開拓地移民募集のおふれを出されたが、それに希望した農民に長岡京遷都後に不要になった荷車を貸し与えたものであり、なんら東大寺に抗議される筋合いのものではない。もうすでに平安京造成地への移民は全国から申し入れがあり荷車は順番待ちだが誰でも荷車は貸し与える」

この忠成の釈明に権操も守敏も引き下がるしかなかったが、権操には桓武天皇の第一皇子の安殿親王(後の平城天皇)と深い繋がりがある長岡京の宮殿に行く旅したくを始めていた。長岡京への正式遷都は11月11日だが、もうこの時期には桓武天皇も公家、それに貴族も引越しを終わっていたが、残された旧宮殿や貴族の屋敷を管理するために忠成は残されていた。

権操と守敏は護衛の僧兵20名を引き連れて新しい都の長岡京へと向かっていた。奈良から長岡京までは約10里だが、その街道は長岡京遷都への引越しの牛車や荷車が数万回通ったのか踏み固まっていた。一行は東大寺の末寺のある山崎で一泊して次の朝まだ完全に完成していない宮殿に入った。

権操と守敏は宮殿には入れるが、天皇への面会は従四位以上で従六位の権操はその資格はなかった。この階級を決める位階は天皇だけが決められるもので本来なら奈良仏教六宗派七大寺院の代表でもある権操などは天皇に面会できる従四位以上でなければならない。しかし、歴代天皇は仏教の暴走を抑えるために奈良仏教の代表には従六位という位しか与えなかった。

小説西寺物語 7話 東大寺僧兵300名稲荷神社と戦へ

従四位以下の者が天皇に要望や意見を伝える方法は従四位以上の公家や貴族に仲介してもらわなくてはならない。そうなれば当然のごとく賄賂や接待が必要になるが、一番効果があるのが、高級貴族に娘や孫娘を行儀見習いという名目で差し出しだすのが近道になる。これで貴族の子でも妊娠すれば生まれた子は貴族になりその親、祖父までも貴族になる可能性もあった。

権操も公家や貴族になにかと喰い込んでいる、その大物筆頭になるのが、桓武天皇の第一皇子の安殿親王で確実に次の天皇だった。その安殿親王に面会を申し入れていた。権操は親王に東大寺の寺領の約三割に当たる寺領を奪われて寺の維持や宝物を収納する正倉院の維持管理、それに僧侶、僧兵の生活まで影響があると訴えていたが、親王は、

「私はその話しは初耳になるが、私が天皇に即位すれば東大寺に新たな寺領を与える。私は元々、長岡京遷都もその後の平安京遷都にも反対だが、その気持ちは今も変わらない。天皇が長岡京への遷都を言い出したのは、天皇が稲荷神社の宮司伊呂具に密書を出した直後になる。背後には稲荷神社がいるが、権操これをなんとかならぬか?」と仰せられていた。

権操は桓武天皇の背後にいる稲荷神社を調べたが、宮司の伊呂具は元平城京の役人で官位も親こそ従六位の学者だが、伊呂具は従十一位と下から二番目の下級役人だった。稲荷神社そのものも藤森神社に敷地を借りた神社で神職も巫女を入れても10人ほどの小さな神社だった。権操にすればこの伊呂具と桓武天皇との接点はわからなかったが、稲荷神社の背後に比叡山が暗躍しているのは乗っ取られた東大寺の末寺のすべてが天台宗の末寺になっていたからだ。

権操は守敏に東大寺の所属僧兵300名で稲荷神社への出兵を命じていた。奈良仏教そのものの僧兵は1000名の軍組織だったが、それは奈良仏教六宗派の寄せ集めで今回の村ごと乗っ取り事件の被害者は東大寺だけで他宗派は稲荷神社への出兵には無関心を決め込んでいた。

784年5月15日午前5時に守敏を総大将に僧兵300名を率いて東大寺を出発していた。東大寺の裏山を超えるとそこはもう山城の国で大和国からすれば山の背になることから山背(城)の国になっていた。ここから稲荷神社までは大和街道を北上して8里ほどの距離だが行軍はかなりゆっくりで守敏は自分が生まれた梅宮神社に立ち寄り必勝祈願をしている。また大和街道沿いの各集落には東大寺の末寺が15ヶ寺もありそのすべてに立ち寄り昼食や休憩をしている。夜は宇治周辺の末寺3ヶ寺に僧兵を分散して一泊していた。

守敏の僧兵軍300名が大和街道をゆっくり北上する意味は奈良仏教の僧兵の力を各奈良仏教の末寺やそれらの農民に誇示する威嚇の行軍になっていた。そして各村、寺ではこの戦争の目的は次

期天皇になられる安徳親王や奈良仏教に逆らった稲荷神社を征伐するという皇軍だと吹聴するものだった。さらに稲荷神社を焼き払った跡地に東大寺京都別院を建立して比叡山に乗っ取られた元東大寺寺領25ヶ寺を奪い返す聖戦だと僧兵にも思想教育をしていた。

この守敏の行軍の話しも村から村へと北上して稲荷神社の宮司伊呂具にも届いていた。伊呂具はこの話しは当然ながら比叡山の耳にも入り、比叡山の僧兵も山を下ってやがて奈良仏教と比叡山との終わりのない宗教戦争になるが、伊呂具は桓武天皇との約束を思い出していた。それは桓武天皇から、

「伊呂具よ...長岡京の遷都から平安京遷都までは20年にかかるが、それまで奈良仏教との戦争を避けるにはどうすればいいのか?、占ってほしい」

そこで伊呂具は占いの結果を天皇に報告していた。それは、
「農民の力を借りることです。そのためには既存の農民や開拓移民の年貢を軽減して味方にするしか手はありません」

それが開拓移民への年貢は10年間は収穫量の1割になっていた。そんなことを思い出しながら、伊呂具は長男の生成(いなり)に最澄への手紙を馬を飛ばして比叡山まで届けさせていた。その手紙には、
「援軍無用」と書いてあるだけだが最澄はその意味を理解していた。

5月16日早朝宇治を出発した東大寺僧兵軍は大和街道を北へ稲荷神社の参道に入ろうとしたが、その参道には見渡す限り竹槍を持った農民が結集していた。参道の幅は5~6間で桜門までは3町ほどあるが、参道の中程に人二人が通るれほどの通路が空けられている。その通路の両端には三重、四重にも農民約1000名が竹槍を持っている中を守敏と300もの僧兵が通るとなると当然ながら僧兵と農民との小競り合いになり双方とも怪我人どころか死人が出る可能性もあった。さすがの守敏も農民を殺すということへの罪悪感を払拭するほどの理論は持ち得なかった。

そしてここに集まっている農民の多くは元東大寺寺領25ヶ寺の農民で先祖代々東大寺に納める年貢に苦しめられて来た経緯がある。この稲荷神社や比叡山は開拓移民としての農民に対して物心両面の支援をしてくれた。その稲荷神社を焼き払い、そこに東大寺別院を作り移民した25ヶ寺を元の東大寺の寺領にして六割もの年貢の復活なんてことはさせないという農民の決意は固く団結していた。

★★★★★新連載小説

[小説盆栽物語 1話 空海唐から盆栽50鉢持ち帰りへ](#)

小説西寺物語 8話 農民稲荷神社炎上を救う

守敏が参道入口でたじろいでいるところに元東大寺寺領25ヶ寺代表村長の伊助が現われた。この伊助は寺に納める年貢などの責任者でまた東大寺の檀家の役員で守敏とは10数年来のいわば仕事仲間になる。その伊助が、

「守敏さま、もし稲荷神社にお参りなら私が案内しますが、お参りに太刀や薙刀などの武器は無粋になります」

「伊助、久しぶりだな～しかし、僧兵から武器を取るとただの坊主になるが...」

「そもそも、僧侶が武器を持つことが間違いになります」

「しかし、そなたらの村を山賊や野武士から守って来たのが僧兵になる」

「それは50年ほど前のお話しになります。それに稲荷神社は山賊でも野武士でもありません」

「それなら、どうすればいいのか...」

「はい、守敏さまは武器をここに置いて参拝していただきます。僧兵の皆さまはここから西の鴨川の河川敷で待機していただきます」

守敏にすれば伊助の提案は屈辱以外なものでもないが、さりとてこのまま僧兵を引き連れて東大寺に帰れず、やむなく僧兵を鴨川河川敷で待機させて守敏は伊助の案内で参道から桜門へと歩いている。

守敏は宮司の伊呂具と面談するというのは想定外の展開になっていた。それは僧兵が300名も武器を持って攻めたら宮司ら神官は一目散に逃げると信じていた。その空家になった神社を派手に燃やして、そしてその火や煙は東山の中腹にある稲荷神社を西二里にある長岡京からは丸見えになる。そこにいる天皇や公家、そして元東大寺寺領の農民まで奈良仏教の力を誇示するのが目的であったが...その守敏が桜門前まで歩いたが、その門の石段の下で宮司の伊呂具が正装で笑って守敏を迎えていた。

守敏は桜門の下で静かに頭を下げて伊呂具の案内のまま本殿の中で伊呂具と向かい合って座っていた。伊呂具が、

「守敏さま、本日はお参りをありがとうございます」

「いえ、それにしても実に立派な神殿になるが、公家さま、貴族さまからのご寄進になるのかな？」

「いえ、これらはすべて全国の国民からの寄付になります。農民は米、それに社殿建造の自主的労役、商人は織物、昆布、油と届きます」

「ほう、それなら稲荷神社の社領は桓武天皇から頂いていないのか？」

「はい、私たちは稲の品種改良から病気の予防、農業用水路の土木工事、神社の前の大和街道の

整備、気象学、医学医薬まで勉強して国家安泰、国民の幸せを願っています。その成果の一部を寄付されそれで神社を運営しています」

「それは私たち奈良仏教六宗派七大寺院、末寺2500ヶ寺も願っているが...」

「ほう...それなら大和国の農民らはすべて幸せになるが...」

この話しの途中で巫女数名がお膳と酒を持ってきた。伊呂具が、

「これ、すべて神様のお下がりです。どうかいただいて下さい」

「いやいや、それはいただけません」

「どうしてですか?、このお酒は奈良から伏見へ蔵ごと移民してきた蔵元のお酒です」

「いや、私の部下も河川敷で腹を空かしている...」「その心配は入りません、なにせ河川敷ですからこれと同じ料理は無理ですが、僧兵の皆さまには神様のお下がりです。農民が接待しています」

その河川敷では大鍋で米を炊いていた。そして別の大鍋には芋煮があり、芋煮と酒で僧兵と農民が大いに盛り上がっていた。元々この僧兵も農民の三男、四男で耕す田畑がもらえなくやむなく僧兵になった経緯もあるので出身村ごとに僧兵も農民も車座になり昔話に花を咲かせていた。守敏も伊呂具も政治的な話しは封印して宗教の話しに花を咲かせていた。この時、守敏は21歳、伊呂具は46歳で次のこの二人の再会は10年後の平安京予定地に建立される官営西寺、東寺の建立の儀式の時だった。そして稲荷神社は東寺に木材を寄進する神社に、西寺には松尾神社が木材を寄進することに決まっていた。

★～この小説も8話にもなりました。この小説を書くきっかけになったのは2019年10月14日に歯医者さんの待合室で何気なく新聞を読んでいると記事に明日15日「史跡西寺跡発掘調査の説明会」の記事、西寺といえば我が家からすぐで生まれて初めて発掘調査を見に行きました。画像は史跡西寺跡 金堂の礎石とされる礎石

この遺跡を見たり発掘調査の説明を聞いてすっかり感動して「そうだ!小説西寺物語を書こう」と思って10月31日に1話をブログに掲載したものです。4話～8話までは主人公の守敏の生誕から21歳までのことを書いていますが、次の9話からはまた3話の続きになります。

また、同じブログで「小説盆栽物語」の連載を初めました。この小説も平安時代の前期のもので空海も出てきますが、空海の陰に隠れた小説西寺物語では「守敏」、小説盆栽物語では「宗景」にスポットを当てています。

★★★★★新連載小説

[小説盆栽物語 1話 空海唐から盆栽50鉢持ち帰りへ](#)

[小説盆栽物語 2話 宗景造園業に弟子入りで盆景和尚となる](#)

小説西寺物語 9話 守敏僧都、都を代表する名僧に!

守敏が西寺建立副造寺司に任命されてから7年が経っていた。金堂や講堂の予定地では基盤が整備されて礎石もそれぞれ36個～40個据えられていた。これより先7年前には桓武天皇は稲荷神社には東寺の木材を、松尾神社には西寺の木材を寄進せよと申し渡していた。

京の都には大昔から京の三大森というのがあった。北の糺の森は賀茂神社のものでこの森の木材はすでに羅城門や朱雀門に使われていた。南の森は藤森で藤森神社のものだが、稲荷神社が藤森神社から買い上げて東寺に寄進していた。西の森は蔵王の森(平安京の裏鬼門)で松尾神社が管理していたので西寺に寄進していた。

それぞれの森で伐採された樹齢500～900年の桧や杉などの原木は7年間乾燥させられて丸太のままや半加工された板などが官営西寺と東寺に運ばれてきた。宮大工は平城京から長岡京まで建造してきた2000名が一斉に平安京に入ってきている。まず先に手掛けたのは旧長岡京から運ばれた宮殿の組み立てになる。そして公家、貴族の屋敷の組み立てが終わり宮大工の戦力は羅城門、朱雀門、官営西寺と東寺に振り分けられていた。

803年4月東大寺別当の権操は高齢と病気のために官営西寺造寺司を桓武天皇から解任されている。その後釜には守敏が当然のごとくなるが、桓武天皇は官営西寺東寺両寺の最高造寺司に守敏を選んでいて。元々東寺の造寺司は貴族で従四位藤原忠長が任命されていたが、忠長は奈良仏教系の貴族で奈良仏教と犬猿の仲の稲荷神社とは材木の搬入一つでも意見が違った。これらの材木を運ぶのは稲荷神社の氏子でもある九条村の農民の労役だが、この農民も忠長の下で働くのを嫌い人足が集まらなかった。それらが原因で東寺の建造工事は西寺より50日も遅れていた。

この奈良仏教が稲荷神社を嫌う理由は10年前の東大寺寺領の25ヶ村をたぶらかして平安京に移住させたのは比叡山と稲荷神社だということをまだ根に持っていたからだ。そこであの稲荷神社焼き討ち事件で対峙したが和解した守敏なら稲荷神社と上手くやれると桓武天皇は守敏を両寺の最高責任者の造寺司に選んでいた。そしてこの守敏に従七位守敏僧都(しゅうびんそうず)という名称(京の都を代表する名僧)を与えていた。

稲荷神社の宮司伊呂具は守敏僧都の西寺東寺の最高責任造寺司のお祝いにまだ造成中の西寺に向かっていた。西寺の正門でもある南大門の石段の下ではかつて守敏が稲荷神社に参拝したときと同じように正装で伊呂具を笑顔で迎えていた。守敏は、

「ようこそ伊呂具さま、本日はお参りをありがとうございます」

「守敏僧都さま、官営西寺東寺の最高責任造寺司のご就任誠におめでとうございます」

守敏が先導して伊呂具は石段を上がり守敏は境内の反対の九条大路より南側を指さしている。そこには見渡す限りの田畑が広がっているが、稲の収穫は終わっているのに青々した野菜が伊呂具の目に入った。伊呂具は、

「あれが守敏僧都さまが農業指導された九条ネギですか？」

「いや、私がというより境内の稻荷神社の敷地で偶然見つけた野菜なのです。それから7年で九条村から鳥羽村、淀村まで栽培が広がり農閑期の貴重な収入源になっています」

「この九条村から南は稻荷神社の氏子なので私からも厚くお礼を申し上げます」

そして伊呂具の目に止まったものがあつた、守敏は、

「あの寺は空海が創建したという九常寺か？」

「はい、大和国から村ごと移民したころは屋根は板張りでしたが、九条村民が裕福になったために今では瓦屋根の立派な寺になりました」

「そうか...その空海は来年804年の第18次遣唐使で最澄さまと共に20年間の留学が決まった」

「20年もですか?、それなら東寺の官主は...」

「いや、それはわからないが...安徳親王さまが次の天皇になられたら西寺、東寺とも奈良仏教に独占されるかも...とりあえず守敏僧都さまは無事故でその任務を遂行されることを願っています」

守敏と伊呂具は西寺の工事の進捗の視察後は西寺北門にある岩瀧寺京都別院の御本尊の前で話しをしていた。守敏は、

「私は10年前の伊呂具さまのお話しは今でも耳に残っています」

「いやいや、私もあの時に守敏僧都が勇気を持って稻荷神社にご参拝していただいたことが比叡山と奈良仏教との宗教戦争を回避させたと感謝しています」

この会話の途中に僧侶数名が大きな鍋を持ってきた。鍋の中には2種類の野菜と鴨の肉が煮えていた、守敏は、

「この野菜はさっきの九条ネギです。そしてこの野菜は南大門の反対の北門から北に広がる西七条村のセリです。たまたま畑の環境があつたのか栽培は大成功して15万人に増えた京の都の冬の野菜の供給に大変喜ばれています」

「農民や国民が裕福になれば犯罪も戦争もなくなる。そうすれば寺や僧侶も...こうして守敏僧都と私が一緒に鴨鍋と美味しい酒がいただけるのも仏さま、神さまのご加護になります」

小説西寺物語 11話 僧侶不足で奈良から僧侶引抜き大作戦

宗景と50名の僧侶は東大寺に破門されたが、そんな悲壮感はなくこれで誰になんの遠慮なく奈良仏教所属の僧侶をこの寺に誘うことができるという破門を喜んでいて、というのも国営西寺東寺の工事現場での僧侶の毎日の仕事というのは伽藍が西と東で14棟、それに五重塔が2棟の宮大工の棟梁や大工の動員数、労役者の村と氏名、木材、金具、石材、瓦の数量と産地、各現場の進捗状況、気象状況から事故の程度など工事に関係することはすべて記録する事務職だったが、さらにこの記録を書き写して朝廷に差し出さなければならない。

この仕事をわずか僧侶50名でこなすのはもう限界を超えていた。そこでいずれ東寺は比叡山の管轄になるので本来は東寺は比叡山の僧侶がすべきだが、比叡山と奈良仏教の宗教戦争を避けるために最澄は修行僧1000名に20年間は山から下りない苦行を命じていた。そうなれば読み書きができるのは奈良仏教の僧侶しかいないことになる。

そこで破門されたことをこれ幸いに僧侶及び見習い修行僧100名を引抜きする大作戦を考えていた。この大作戦の僧侶に選ばれたのが、皮肉にも一時奈良仏教に買収された5名の僧侶だった。これは奈良仏教への連絡方法やその関係寺院を知っているからこそ攪乱大作戦ができてまた奈良仏教の動きもわかったからだ。

この引抜き大作戦の隊長には僧侶歴30年の解本が選ばれた。解本はまず仲間の僧侶50名の兄弟や親戚に奈良仏教の僧侶は居ないかの調査を始めた、その結果65名の僧侶が居ることがわかった。その僧侶に誘いの手紙を書いてもらいその手紙は隊長以下5名が大和国に潜入してなるべく僧侶本人に手渡していた。

その手紙には統一した文言があり、それは国営西寺東寺の造寺工事は官営工事で我ら従七位守敏僧都さま以下50名の僧侶は準公務員としての身分があり従十二位下(24階級の下)の給金も朝廷から支給されています。まだこの工事は20年ほどかかるが、完成後は従十二位への昇格が保証されています。そしてその身分(官位)があれば日本中から住職の依頼が殺到いたします。ぜひ、日本の歴史に未長く残る大事業に貴殿の力をお貸し下さい。

この手紙が各僧侶に届くと同時に大反響が大和国を襲った。このころの奈良仏教六宗派七大寺院での修行僧は6000人ほどいたが、末寺は2500ヶ寺院でそれらの寺には住職はいる。これらの寺が一代限りならやがて修行僧にも住職という目もあるが、これは事実上の世襲制になっていたためによほどの学問があるか捏ねがなければ一生修行僧で終わってしまう。

一方の同じ修行僧でも親が住職なら少々頭が悪くても将来は約束されていた。つまり、3500名ほどの僧侶には将来の夢も希望もなかった。さらに、比叡山が台頭して来ると奈良仏教の寺は次々と改宗して現在の住職さえ身分の保証は不安定だった。そんな中での守敏僧都の僧侶大募集の宣伝は奈良仏教の幹部僧侶に衝撃を与えた。

これが比叡山の策略なら即時に奈良仏教の僧兵が比叡山を攻めるが、比叡山には最澄も空海もいないので比叡山を攻める根拠がなかった。そこで敵は守敏僧都ただ一人で守敏を殺せばすべて解決すると考えるにはそんなに時間は必要なかった。一方の手紙を受け取った僧侶は寺を夜逃げ同然で京の都の西寺に駆け込んできた。それが56名で別に村々に15歳以上の見習い修行僧を募集したところこれが予想より多くて72名も集まっていた。さらに岩瀨寺に残っていた僧侶10名も岩瀨寺の御本尊の十二神将を背中に背たろうて駆け付けてくれた。

守敏僧都は総勢188名に増えた大所帯のために西寺と東寺の境内に宿坊建設の許可を朝廷に求めている。それまでは西寺の事務僧40名を西七条村の常安寺に、東寺の事務僧40名を九条村の九常寺を仮の宿坊にしていた。守敏はこの増えた僧侶の前で稲荷神社の宮司伊呂具との10年前の会話を紹介していた。それは、

「はい、私たちは稲の品種改良から病気の予防、農業用水路の土木工事、神社の前の大和街道の整備、気象学、医学医薬まで勉強して国家安泰、国民の幸せを願っています。その成果の一部を寄付されそれで神社を運営しています」

「それは私たち奈良仏教六宗派七大寺院、末寺2500ヶ寺も願っているが...」

「ほう...それなら大和国の農民らはすべて幸せになるが...」

守敏はさらに、

「私がもし伊呂具宮司とお会いしなかったら今までの古い奈良仏教の農民への弾圧とも取れる政策を仏教の教えと信じてきたと思います。この京の都では農民がこの西寺東寺の建立のために強制ではなく自発的に年間30日もの労役をしてくれています。さらに大所帯になった我々の食料の米、味噌、塩野菜まで確保していただきます。我々はこの感謝の気持ちを仏様と農民にお返ししなければなりません。そのために「農業教学部」という部署を立ち上げます、その部員を募集しますから参加者は私に直接申し込んでほしい」

そのころ奈良仏教では廃寺になった岩瀨寺の御本尊の十二神将の仏像12体が元岩瀨寺僧侶らが無断で持ち出し京の守敏僧侶の手に渡ったという奈良仏教六大宗派七大寺院の緊急会議が開かれていた。奈良仏教代表の権操は、

「あの十二神将は私が掘ったもので東大寺の所有になる。しかも、国宝に指定されたのは桓武天皇であり、守敏は東大寺から指名された住職でなんら所有する権利はなく守敏は国宝を奪った盗賊になる」と厳しく批判していた。この権操の批判は正しくて誰の反論もなく奈良仏教全員の意見として十二神将を奪い返すために僧兵1000名を動員する決議がなされた。

小説西寺物語 12話 神野親王武家源氏を旗上げ

東大寺の権操が威勢よく奈良仏教の僧兵1000名を京の都に派兵するというが、10年前の稲荷神社焼き討ち未遂事件でも被害寺は東大寺だけで今回の十二神将を略奪された被害者は東大寺だけであった。しかもこの派兵の大將を大安寺の明正に任命されたが、大安寺の僧兵は一応250名登録されている。しかし、それは名目だけで前回僧兵の派兵は50年前の野盗退治で僧兵の戦闘衣装の山法師衣は武器蔵の中で虫に食われてボロボロで武器の太刀、薙刀などは赤錆びていた。

これは東大寺を除く六大寺院もそうで戦闘服や武器を揃えるには半年はかかるというが、その資金さえ六大寺院は出すのを拒んでいた。そこで権操は僧兵は東大寺単独ではなく奈良仏教の連合軍という名目で大將のみを大安寺の明正にしていた。806年2月1日早朝に東大寺を出発した明正率いる300名の僧兵はその日の夕方宇治の東大寺末寺の3ヶ寺で宿泊していた。

これら僧兵300名の進軍の情報は西寺の守敏僧都はもちろん、比叡山や稲荷神社の伊呂具にも届いていた。そして宇治までの僧兵の行軍を農民らも目撃しているのに農民らは野良仕事の手を休めて見ているだけだった。先の稲荷神社焼き討ち事件では農民らが行軍の様子などを逐一走って稲荷神社に報告している姿があったと稲荷神社焼き討ちに参加していた僧兵から聞いていただけに明正は不気味さを感じていた。

この部隊より先に情報を集める僧兵を京の都に潜入させていたが、宇治の明正に届いた情報では稲荷神社も比叡山、それに西寺もいつもと同じで何の動きもないという。2日の朝、僧兵を宇治で待機させて明正と12名の僧兵だけで西寺に向かった。この12名とは十二神将を背たろうて持ち帰るための人員になる。

明正らは稲荷神社の参道前からさらに北進して九条大路に入るが、これより東の東山からは荷車に山と積まれた西寺東寺の瓦と思われる荷車が列をなして西に向かっていた。明正らの僧兵の隊列もこの流れで行進しているが、人夫らの誰一人も山法師姿を気にもしていなかった。これには明正らの僧兵も我々の拳兵や目的を京の都の誰にも知られていないことに愕然としていた。

東寺の南大門から建造中の金堂を明正らは見ていたが、宮大工の指示で労役の農民ら約200名が働いていた。明正らは西寺の南大門から入り元の岩淵寺京都別院に入る前に門の上の真新しい寺額を見るとそこには「源光寺」と書いてあった。そして本堂にもやはり源光寺の寺額があった。

明正は守敏僧都に面会を申し入れたが、守敏は現場にいるということで僧侶が守敏僧都を探しに行くから本堂で待っていてほしいと明正と12名の僧兵は待たされていた。その本堂には薬師如

来とその薬師如来を守るように右と左に十二神将が祀られていた。僧兵らはこの静かで気味の悪い展開にかなり動揺していた。

やがて守敏僧都が本堂に入り座ると同時に明正が、
「本日は奪われた十二神将を持ち帰るために来ました」
「それだけならなんのために宇治に僧兵を待機させている」
「それは守敏僧都が十二神将を返さない場合に備えてになる」
「そか、それならいいがもしお主が率いる僧兵300名が宇治橋を渡りこの官営の西寺に武器を持って土足で入っていれば国賊として官軍が出動していた」
「なに～そんな馬鹿な...天皇の官軍は宗教戦争には中立で口出ししないことになっている」
「西寺も東寺も官営の寺院になるがそこに武器を持って侵入すれば国賊になる。さらにこの源光寺は將軍正二位源神野親王さま源氏の御菩提寺になる」
「なに～神野親王さまの御菩提寺?...」

正二位將軍源神野親王(後の嵯峨天皇)とは桓武天皇の第二子で若くして攘夷大將軍左大臣坂上田村麻呂の筆頭武將となり日本国官軍の總指揮官になる。政治的には第三位、軍事的には第二位の地位になる。(この神野親王が源氏の祖となり、源氏物語、平家物語になる)守敏僧都はさらに、
「この寺名の「源光寺」は神野親王さまに賜った、寺額の文字も神野親王さまの揮毫になるが明正殿はそれでも私の命と十二神将を奪う考えか聞きたい?」

明正は守敏僧都のこの問に答えることができなかった。そこで明正に、
「お主が宇治橋を渡らずに宇治に僧兵を待機させたのは十二神将さまの御導きになるが...」
明正はこの問にも答えられずに心の中で...当初の計画では一気に西寺を襲撃して守敏を殺して十二神将を奪い返す予定だったが、京に近付いても余りにも静かで不気味を感じて僧兵を宇治に留め置いたことが十二神将の御導きだという守敏にも反論ができなかったからだ。

さらに明正は源神野將軍は年貢の米や各地の名産を奪う山賊や野盗、それに国賊と烙印を押された者には情け容赦なく一族郎党皆殺してしまうという残虐性を持つ皇族の近衛兵だということを知っているからこそ守敏僧都の問に下手に答えたら首が飛ぶことになる。だが答えなければならない...そして明正が悩みに悩み考えたのが、
「私は本日奈良仏教七大寺院の代表の使者として守敏僧都さまの破門を取り消すという奈良仏教の決定をお知らせに来ました」
「おお、そうか～明正殿、それはそれはご苦労さまでした。それで十二神将の仏様はどうかになるのか?」
「それは守敏僧都さまの源光寺さまにお祀りいただけるのが自然になります」

この明正の苦肉の策に守敏僧都は、

「これで私も奈良仏教の一員となりこの西寺を盛り上げなければなりません。それには西寺境内に30もの塔頭が必要になるが、明正殿には大安寺の筆頭塔頭の住職になっていただき、残りの塔頭29ヶ寺の建造及び宗派寺院選びの責任僧になっていただきたいが？」

「わ、私がですか？」

「そうです。明正殿がこのまま奈良に帰れば破門は元より、命の危機にもなりかねません。幸い昨日朝廷から私に西寺官主の内定がありました。その私が明正殿を指名したのですから奈良仏教から異論が出るはずはありません」

明正は守敏僧都の心ある配慮に涙をこらえながら守敏僧都に深々と頭を下げていた。

小説西寺物語 13話 巨大権力(奈良仏教)には経済封鎖を

東大寺の別当で奈良仏教六大宗派七大寺院の代表だった権操はこの10年で僧兵300名を稲荷神社と西寺に出兵させていずれも戦わずして負けたことで代表を降ろされていた。それだけでなく戦いの大將僧の守敏は稲荷神社の伊呂具に丸め込まれた、そして今回の出兵では明正が守敏に丸め込まれて官営西寺の奈良仏教側の塔頭建造及び宗派寺院を選ぶ責任者を守敏僧都から明正が指名された。

この明正は大安寺での地位は第四番目で奈良仏教では二十五番になる。奈良仏教のどの宗派も寺院のすべてが京の都の洛中に布教の核となる末寺を進出したかったが、桓武天皇は比叡山と奈良仏教の宗教戦争を避けるために奈良仏教の末寺は洛中洛外の平地には認めなかった。したがって奈良仏教系の寺は洛外の東山や西山にしかなかった。山は確かに修行にはいいが、収入源の末寺と檀家の布教にはやはり農民の村に進出するほうが儲かる仕組みになっていた。

そこで西寺の塔頭寺院が30ヶ寺も建立されるのは千載一遇の時期だと守敏僧都に最も嫌われている権操を失脚させ奈良仏教六大宗派七大寺院の代表に大安寺の道慈貫主を選んでいて、塔頭は30寺院でこれを六大宗派で割るのか?、七大寺院で割るのか?、つまり、六大宗派なら一宗派5ヶ寺になるが、七大寺院なら4寺院と5寺院となり不公平になると揉め始めたが、これらの責任者も明正になるので明成は頭が痛かった。

そこで明正は西寺の塔頭建立の条件を奈良仏教に明示していた。それは各寺院の寺領(荘園)の農民に塔頭建立のための特別年貢の上乗せをしない寺ということだった。これは10年前の寺領の年貢は固定収穫量の六割で米の豊作の年がいいが、不作の年は農民が食べる米が残らないほどの残酷な年貢だったが、この年貢制度に不満な農民が稲荷神社の伊呂具の指導で東大寺の寺領25ヶ村の全農民が京の都に移民した事件がある。

これに懲りた奈良仏教では年貢の制度を改めて収穫量の五割と決めていた。ところが今回の西寺塔頭建立費用をまた農民から巻き上げると思った明正は先手を打って農民を守っていた。しかしながら、この明正も奈良仏教の幹部として以前は仏教は農民や国民を守るためにあるので寺の建立のためなら農民から過酷な年貢を取り上げてもそれは農民や国民に還元されると信じて疑ってこなかった。

この明正の提案に奈良仏教は緊急に奈良仏教幹部会を開いたが、この幹部会は七大寺院の寺の地位三位までの21名で構成されているので明正には参加する資格も参加する意思もなかった。そもそもこの幹部会にも参加できない明正を守敏僧都殺害及び十二神将を奪い返す僧兵連合軍の大

将にするこの幹部会の知恵の無さに呆れかえっていた。当然ながら幹部会は当事者の明正を会議に招集するが明正は病気を理由に出席を拒んでいた。

この明正の年貢を上げないという提案は奈良仏教の寺領のすべての村々に知れ渡るには3日もかからなかった。この奈良仏教の過酷な年貢を収穫量の五割に下げるきっかけになった稲荷神社は我らの生き神様だと各村々には稲荷神社の赤い祠が建立されて年一回稲荷神社にお参りする稲荷構も組織されていた。そんな折にこの年貢の値上げを阻止してくれた明正の人気はうなぎ登り以上の鯉の滝登りほどになった。

以前の奈良に平城京があったころは奈良仏教と高級貴族は賄賂や何やかやで黒い癒着をしていたのでいわゆる奈良仏教系と言われている貴族は朝廷内に四割ほどいた。このころは何かと奈良仏教に不利な出来事があればすぐに貴族の屋敷に駆け込み朝廷内で工作していたが、なにせ都が長岡京や平安京に遷都されてからはこの機動力が奪われた上に都の奈良系貴族から情報が上手く伝わってこなかった。

このことが桓武天皇が奈良から都を遠く離れた大きな理由だが、もう一つの理由は奈良仏教の資金源を遮断した上で奈良仏教が100年間貯め込んだ金、銀、財宝などを使わずためだつた。ただこの方法は簡単で天皇から与えられた寺領を剥奪すれば生産性のない奈良仏教はたちまち衰退するが、奈良仏教も6000名といわれる僧侶を軍隊化して京の都に攻め入れればたとえ官軍が勝利しても京の都は火の海になることになる。

そこで手始めに東大寺の寺領の農民らの移住を認めてそれが成功して京の都は人口15万人(当時のパリ、ロンドンに人口は約10万人)の大都会になっていた。さらに西寺の塔頭30ヶ寺を開放して奈良仏教の金で建立することを許していた。この塔頭とはいえ官営でないので労役の労働力は使えず宮大工から木材、瓦、石材、金具まですべて各塔頭の宗派が出すので莫大な負担になる。そして明正がその資金源になる農民への年貢負担(増税)を認めなかった。

これらの報告は守敏僧都から朝廷に伝わり桓武天皇は東大寺の別当と奈良仏教の代表を降ろされた権操の官位従六位を剥奪して従七位守敏僧都に二階級特進で従六位に、明正には官営西寺東寺副造司と従十二の官位を与えられた。これら京の都のできごとは日本中を駆け巡り農民をいじめる宗派は稲荷神社の伊呂具が祈祷で退治してくれるという新たな神話が誕生していた。

寺領の農民からの年貢の増税を諦めた七大寺院は各寺院の蓄財の差で塔頭の建立の数が少し歪になったが、東大寺が八寺院、大安寺が七寺院と多くて他の五本山は三寺院とほぼ末寺の数通りの配分となった。明正が所属する大安寺は七寺院だが、この中の一つは明正が大安寺塔頭筆頭寺院住職の寺になることにはもう奈良仏教幹部の誰一人も反対できないほど奈良仏教の寺領の農民から明正は支持と信頼があった。

小説西寺物語 14話 皇太子の不倫...人妻・薬子の変

806年3月3日に桓武天皇の生前葬儀及び「桃の花を見る会」が開催されて貴族と農民ら5000名が酒と茶のふるまいで大いに盛り上がった後の3月の10日ごろから長年の激務の過労で天皇は寝込まれてしまった。それが天皇の余命一ヶ月との噂が宮中を駆け回った。その噂は比叡山や稻荷神社、それに奈良仏教にも届いていた。

これを喜んだのが奈良仏教で次期の天皇には桓武天皇の第一皇子の安徳親王と決まっていたが、この安徳親王は父親の天皇の長岡京遷都、平安京遷都には大反対していた。それを支持していたのが奈良仏教と奈良系の貴族で桓武天皇亡き後は再び奈良に都を遷都するという意味で安徳親王自分自身で第51代天皇の名前は「平城天皇」(へいぜい)と決めていた。

奈良仏教はいずれ必ず訪れるこの日のために元平城京の宮殿や皇族、公家の屋敷をそのまま保存管理していた。つまり、天皇の身一つあれば明日にでも平城京遷都が誕生することになるが、まだ天皇は生きている。そこで奈良仏教は「桓武天皇御病氣治癒大法要」を開催すると発表していた。しかし、それは表向きの大法要で実態は金集めの手段で奈良仏教七大寺院の末寺2500ヶ寺に大法要寄付としての金額を押し付け、末寺は農民から集金するというようになっていた。

いやいや、これだけではなくもし天皇が崩御されたらまた大法要が行われ同じ手段で金集めするのは奈良仏教の幹部だった守敏僧都も明正も知り尽くしていた。やはりその通りで奈良仏教から5月5日大安寺で「桓武天皇御病氣治癒大法要」を開催するから守敏僧都及び明正、それに奈良仏教塔頭建立僧侶350名にも参加するようにと要請があった。

守敏僧都と明正はまだ完成していない西寺講堂に塔頭建立のために派遣されている350名の僧侶全員を集めて明正は、

「大安寺で桓武天皇のご病氣治癒のための大法要が5月5日に行われるが、守敏僧都は多忙を理由に欠席されます。私も奈良仏教塔頭30ヶ寺の建造が忙しくて出席ができませんが、この中の皆様に参加されるのは自由ですから是非参加して下さい」

とって講堂の350名の僧侶にいうが、誰も意見をいう僧侶はいなかった。さらに、「それぞれが所属している各本山から西寺塔頭の代表僧侶に大法要への参加の要請や命令があればそれぞれが判断していただき私や守敏僧都になんら相談も許可も報告も入りません」

これは官営西寺は西寺境内の塔頭建立の土地は貸し与えているが、それぞれの自治権には介入しないといい原則があったからだ、これをこの場で表面したのは一つの塔頭建造には10名~15名の僧侶が参加しており8寺院の塔頭を建立する東大寺の僧侶は106名にもなっていた。この106名の

中には守敏僧都や明正の一言一言を漏らさず東大寺に報告する役目の僧侶も当然ながら存在していたからだ。

この桓武天皇の余命一ヶ月とする噂を奈良仏教に吹聴したのは誰になるかの噂がまた宮中に広がっていた。たしかに天皇は寝込んではいるが、奈良仏教が資金集めの大法要をするほどではないと朝廷は火消しにやっきだった。そしてその犯人は奈良仏教系の貴族で中納言藤原縄主の妻薬子の弟の藤原忠成だとわかった。

この忠成を問い詰めるとこの情報は東大寺の僧侶の行心に伝えたと言っていた。この行心とは西寺での東大寺塔頭八寺院建立の責任者でいずれ筆頭塔頭の住職になることが内定していた。その行心を源光寺に呼び守敏僧都と明正で尋問していた。行心は、

「たしかに私は忠成さまから桓武天皇が危篤と聞いてそれをそのまま東大寺に手紙で伝えましたが、それが...何か？」

そこで守敏が、

「忠成さまとはどこで知り合った？」

「それは一条御前にある忠成さまのお屋敷になります。それより前に忠成さまの姉君の薬子さまが建造中の塔頭を視察なさって私が住職になったら御本尊の仏像を寄進されると約束されました」

この薬子とは中納言藤原縄主の妻になるが、この縄主こそが奈良仏教派の最高官位の公家になっていた。

そこで守敏はなぜ薬子さまのお屋敷ではなく薬子の弟のお屋敷に行ったのか？

「そ、それは...言えません」

「そか、それなら今すぐこの官営西寺の敷地から出て行ってもらいます」

「あの～実は忠成さまのお屋敷で薬子さまを抱いてしまいました。それも3日に一回、もうそれで五回はお屋敷に呼ばれています」

「おいおい、行心...薬子さまといえどもう40過ぎの厚化粧のおばさんではないのか？」

「はい...それでもし薬子さまに私の子供が出来たら私を東大寺の貫主にすると約束していただきました」

この行心の話しを要約するとこの薬子の娘が安徳親王の妾だが、なかなか子供ができないので薬子は親王にどんな女性がお好みですかと聞くと親王は若い女性より年増の人妻が好みと答えたので親王と薬子はその日に不倫をしていたという。ところが薬子もなかなか妊娠をしないので行心が種馬になったという。

薬子にすれば次期の天皇になるのが間違いない安殿親王との不倫は火遊びというより出世の糸口になるばかりか子供ができれば皇太子の母、いずれ天皇の母にもなれる可能性があったからだ

。そして正妻が何かの事故で亡くなったら...つまり、そうなればファストレディーの道もある、その道をひたすら歩み安殿親王の公の愛妾の自分の娘も敵にしていた。もし、この娘に男の子でも産まれれば不倫相手の子供より皇太子になる確率が高いと思ったのかその娘まで宮中から追い出していた。

小説西寺物語 15話 平安時代の美魔女薬子の野望

守敏僧都は行心から聞いた話しを書面にして宮中の正四位藤原信数を通じて桓武天皇に読んでもらおうと天皇は病気で寝ていたが、信数に次のことを命令していた。一、中納言従三位は藤原縄主は従七位に格下げの上九州太宰府の長官(県知事)に左遷、二、藤原薬子を官位剥奪の上丹後間人に幽閉、三、弟の藤原仲成は官位剥奪の上佐渡ヶ島に島流しをする。

この天皇の命令には反論の機会も与えられず命令発布後1日以内に京の都から出発しなければさらに厳しい刑罰が待っていた。これら3名がまったく違う方向の地方に飛ばされたのはまた再び連絡を取り合い謀反を計画しないための判断から命令を下された。この3名が出発したのが806年4月1日で桓武天皇が崩御されたのがその8日後の4月9日だったが、もしこの事件の発覚がその後だったら天皇はこの命令を下していなかったのでは奈良仏教の天下になっていたかも分からない。

桓武天皇の葬儀には奈良仏教からも七大寺院の貫主がそれぞれお供の僧侶20名を引き連れて参列しようとしたが、誰も宮中には入れなかった。それは奈良仏教の貫主のすべてが官位を授与されていなかったからだ、官位のある比叡山の最澄と空海は唐国に留学中で官位のある比叡山の僧侶は比叡山から修業のために下山は出来ない。そこで朝廷は従六位の守敏僧都を日本国を代表する僧侶として葬儀の読経を任していた。

この葬儀への奈良仏教の参列を事実上拒否したこの采配に腹を立てた次期天皇の安徳親王は葬儀の責任者の大納言藤原縄和に抗議をするが、縄和は、

「安徳親王さまが即位される6月9日までは桓武天皇の遺言通りに事を進めます。そもそも今回の薬子さまの件では奈良仏教が背後にいることは親王さまもご存知のはず」

「しかし、我が国の伝統ある奈良仏教を天皇の葬儀に参列させないのは国の威信に関わる」

「いえ、守敏僧都は奈良仏教を代表して参列されています。これも亡き天皇の遺言にあります」

「いやいや、奈良仏教は守敏僧都を代表と認めていない」

「それは奈良仏教内部の揉めごとで朝廷にはまったく関係がありません」

さらに大納言藤原縄和は安徳親王に、

「親王さまが平城天皇に即位されると同時に將軍従正二位源神野さまが平城天皇の皇太子になります」

「なに!神野親王は武将になったはずだが?」

「はい、これも桓武天皇のご遺言になります」

この安徳親王の正妻には子供が授からず愛妾については子供は授かるが、すべて姫君だった。つまり、この親王の男の子を産めば誰でも皇太子の母になれていずれ天皇の母にもなれた。これ

を实践したのが薬子になる。しかし、これが成功しなかったために天皇に一番血が濃い弟の神野親王が皇太子になったのは当然になる。

この神野親王は兄の安德親王の腹違いの弟だが、どうせ兄が天皇になるので神野は武将になろうと攘夷大將軍坂上田村麻呂の部下になり將軍源神野として源氏姓の武家を旗上げしていた。大將軍の坂上田村麻呂は左大臣も努めていたのでこの將軍源神野が事実上の日本国官軍の武将3000名騎馬300頭の総指揮官になっていた。ただ、この將軍は肩書や名誉職ではなく武術はもちろん馬術は將軍源神野に勝てる武将はいなかった。

さらに日本国国民の成人男性のすべての徴兵権も將軍神野が持っていた。これは外国の軍隊が日本に攻めて来た場合は農民らに徴兵の命令ができるのだが、平安京時代は一度も発令はされていない。この日本の国の軍隊が3000名と少ない気がするが、この徴兵制度があるので心配はなかった。(戦国時代に光秀軍1万3000名の軍勢とかいうが、この場合でも武将(家臣)は一割程度と少なくほとんどが農民の徴兵だった)

806年6月9日に第51代平城天皇の即位式が執り行われていた。その平城天皇の最初の仕事は丹後の間人で幽閉されていた薬子の官位を復活させていた。弟の忠成、薬子の夫の縄主もそれぞれ元の官位を復活させて元の屋敷に住むことを許されていた。その20日後には縄主の屋敷で奈良仏教系貴族23名、奈良仏教の幹部14名で平城京への復活第一歩記念大宴会が開催されていた。一方の薬子は平城天皇との夜の儀式を誰の目も気にしないで連日のように繰り広げられていた。

これは薬子にとっては思いがけない大逆転で夫のいる身ながら、宮中公認の天皇の愛妾という立場を手に入れていた。当然ながら薬子の目的は平城天皇の子供を授かることだから薬子の夜の奉仕はそれはそれは激しいものだろうと宮中の官女、侍女たちはこの噂で大いに盛り上っていた。ただ、薬子は平城天皇は病弱で種付け能力は弱いと判断する一方で自分が妊娠しないのは年増の私のせいでは無いと信じていた。そこで娘婿の若い藤原紀良を薬子独特の色気で誘惑して天皇の子を産む作業も忘れなかった。(この薬子は今でいう平安時代の美魔女になる)

この薬子から官営西寺の建造進捗状況を視察したいと守敏僧都に申し入れがあった。なにせこの薬子さまは中納言藤原縄主さまの妻で平城天皇の愛妾で官位も従四位で従六位の守敏僧都では顔を上げてまともに話せる立場ではなかった。その薬子を源光寺の門前で迎え仏間に案内した守敏僧都に薬子は、

「平城天皇は従六位守敏僧都の官位を剥奪されました。そして奈良仏教六宗派七大寺院の代表大安寺の道慈貫主に従七位の位と官営西寺東寺の総造寺司に任命されました。したがって守敏僧都はただちにこの寺から退却してほしい」

「官位剥奪の件と官営西寺東寺総造司解任の件は了承しました。ただこの源光寺は將軍源神野さまから源氏の菩提寺として住職の私に任命されたもので將軍源神野さまからの命令がなければ私

の自由にはなりません」

「なにをいっている神野親王さまは皇太子になられた」

「いえ、将軍は神野親王さまの末弟の源融(光源氏)さまがなられて武家の源氏さまの菩提寺にはなんら変わりはありません」

「守敏、私の命令に逆らうということは死刑も覚悟の上か？」

「はい...」

この日の夜、京の都は大嵐(台風)に見舞われた。公家や貴族の屋敷にカミナリが落ち、元々板張りだった屋敷は吹き飛び雨戸が一枚外れるとそこから風が入りすべての屋根や雨戸が吹き飛ばされていた。幸いこの大嵐しの被害は頑丈な西寺東寺にはなかったが、公家、貴族の屋敷からは西寺東寺で働いている約2000名の宮大工に屋敷の修繕の依頼が殺到していた。

小説西寺物語 16話 平安時代のスーパースター光源氏誕生

この台風と落雷で多くの公家、貴族の屋敷で被害があった。すべての屋敷には宮大工が入り込んでいたが、このような台風でもない少し強い風が吹いた後には必ず宮大工の棟梁が被害がある無しのご機嫌伺いに来るので今回も来ると信じていたが、昼になってもどの屋敷にも誰もこなかった。薬子の屋敷は堀川三条にあったが、カミナリが落ちたのか屋根が抜け落ち雨戸がすべて風で飛ばされて薬子が座る場所がないほど荒れていた。

そこで薬子に仕えている下級公務員の従十一位の藤原縄春を宮大工の工房に走らせたが大工の棟梁の源八は官営の東寺西寺の建設現場にいるという。縄春が東寺西寺の総建造現場事務所になっている源光寺を訪れるとそこには縄春と同じ目的で来ている下級公務員が50数名も並んでいた。やっと縄春の番になって源光寺の僧侶に、

「私は従三位の藤原縄主の妻の従四位薬子さまの屋敷の者だが、宮大工の源八さんの現場を教えてください」

「棟梁の源八さんは東寺の金堂の第三工区にいます」

これを聞いて東寺の第三工区に早足で急いで歩いているが、西寺や東寺の各現場には宮大工や労役の作業員はかなり沢山働いているが、薬子の屋敷だけでなく他の貴族もこの台風で相当被害があるのに?、と思っていた。縄春はやっと第三工区の宮大工の棟梁の源八を見つけて、

「棟梁～薬子さまのお屋敷の屋根が吹っ飛び大変なことになっています」

「いや、本来なら何を置いてもお屋敷に駆け付けなければなりません、この仕事は官営ですので総造寺司さまの許可なく持ち場を離れば私の首が飛びます」

「そか、それなら総造寺司はどこにいるのか」

「昨日までは守敏僧都だったが、今日からは大安寺の道慈貫主になりました」

「それなら道慈貫主はどこにおられます」

「大安寺は奈良ですから道慈貫主の赴任はいつになるかはわかりません」

この棟梁と貴族との同じ会話は西寺東寺の宮大工のすべてが打ち合わせてやっていた。そしてこのこのことが宮中に知れ渡ると同時に薬子が天皇に無断で守敏僧都を解雇した。その守敏僧都が薬子への怨みの護摩祈祷で大嵐とカミナリを都に呼んだの噂が宮中に広がるのは半日もかからなかった。この夜は幸い雨も振らず公家や貴族は穴の開いた屋根から台風一過のお月さまを愛でていた。

台風から2日目の朝の宮中は守敏僧都の呪いの護摩祈祷でこれだけの被害が出たと薬子の夫の藤原縄主に非難が集中していた。そして宮大工が集団で朝廷に逆らったとことに対しては国賊でこ

れらを先導した守敏僧都を死罪にするべきだという意見が公家などに広がり、官軍の大將の將軍源融(光源氏)に国賊守敏僧都退治の出動の要請が薬子から源融にあった。源融の屋敷(枳殻邸)は六条河原にあり、東側の鴨川の堤防はこの屋敷のために頑丈に作られて風、水の被害はなかった。

源融からすれば薬子は兄の平城天皇の愛妾になるが、源融は兄の平城天皇とは仲が悪くその下の皇太子(神野親王)とはすこぶる仲が良かった。源融はこの要請を受けて自ら馬に乗り、武將騎馬100騎を引き連れ朱雀門から朱雀大路を南下した。大路の両脇には黒山の人だかりで先頭の武將が源融でこれが初陣だと分かれると若い女性たちは興奮して失神する場面もあるほど源融は人気があった。

源融の隊列は羅城門(凱旋門)から九条大路を西へ、西寺の正門の南大門から西寺境内の武將源氏の菩提寺の源光寺に入り住職の守敏僧都と面談していた。源融は守敏に、

「兄に代わり、私が將軍になりました。したがって私がこの源光寺にお世話になります」

「ありがとうございます」

「ところで守敏僧都は誰に官営西寺東寺の総造寺司を解任されたのですか？」

「そ、それは薬子さまです」

「ささ、それだが、私も先程薬子に会ってはきたが、薬子は西寺の建造の視察には行ったがそのようなことをいった覚えがないといっています。したがって守敏僧都は従六位で官営西寺東寺の総造寺司の役目を遂行して下さい」

この二人の話を隣の部屋で聞いていた宮大工の棟梁らは一斉に荷車に板や柱を積んで各お抱えの公家、貴族の屋敷に出発していた。そして源融の隊列の帰りは南大門から出て九条大路を東へ、そして凱旋門から都に入城したが、もうこの話が都中に知れ渡りこの光源氏の武將騎馬隊100騎は戦争に勝利して最初に京の都の凱旋門をくぐる若き武將に歓声と拍手さえ贈っていた。この源融の見事な采配に都人は最大の拍手を贈りいつからかこの官軍の100騎馬出動を「源光寺の変」といい源光を逆さにして源融のことを六条河原の光源氏さまと呼ぶようになっていた。

この光源氏の派手な演出の騎馬100騎大行軍に度肝をぬかれたのが、官営西寺の境内で奈良六大宗派七大寺院の塔頭を建造するために奈良から派遣されている僧侶は350名はいるが、その僧侶らは守敏僧都のことを奈良仏教の敵だという思想を叩き込まれて派遣されている。その敵である守敏僧都は辛い労役の農民から慕われ、また、官軍の將軍から稻荷神社の宮司などの人脈があるが、我が奈良仏教は農民から嫌われ都の人脈といえば厚化粧のおばさんだけだと嘆いていた。その嘆きの通りで30の塔頭建造の建造工事は木材も人材も揃わなくて今回の台風事件もあって大幅に遅れていた。

小説西寺物語 17話 薬子の限りない野望...その1

806年6月に第51代天皇に即位した平城天皇は病弱で政治にはそんなに興味はなかったが、天皇の愛妾の薬子は第二夫人と言われるほど宮中では権力者になっていた。さすがに右大臣や左大臣、それに大、中、小納言の人事には口出しはできなかったが、ただこの下の参議や従四位～従三位の高級貴族の人事には口出し前桓武天皇系の貴族を左遷してその後釜に奈良仏教系貴族を配置していた。

この薬子は天皇の子を身籠り男の子だったら皇太子に、やがて天皇に育てて皇太子の母、天皇の母として宮中を我が物にしようと企み若い僧侶や実の娘の婿を色仕掛けで誘惑して薬子も若い男の体を楽しみながら妊活をしたが、残念ながらもう50歳近くになっていた薬子には懐妊の兆しもなくこの策略は諦めていた。そこで平城天皇の政権はそんなに長くはないと判断していたが、次の天皇は必然的に皇太子である源神野が天皇になる。そうなれば薬子は官位を剥奪されて男気のない尼寺の尼僧になるしかなかった。

薬子は矢継ぎ早に人事の刷新を推し進めていた。奈良仏教六宗派七大寺院の代表の大安寺貫主の道慈を宮中に呼び道慈に改めて従六位の官位を与えて桓武天皇が認めなかった奈良仏教の末寺の洛中、洛外の平野部への進出を平城天皇の命令だとして認めていた。一方の奈良仏教と敵対視してきた最澄、空海の比叡山は最澄空海とも唐国で修業中の上約1000名の僧侶も比叡山で修業中で奈良仏教にすれば京の都の洛中洛外に無数に出来た村落の寺に布教して奈良仏教の勢力を誇示する千載一遇の展開になっていた。

この最大の作戦の大本営は官営西寺の塔頭30寺院に当然なると道慈は西寺の塔頭建造現場を視察していた。西寺の金堂や講堂の大伽藍は大安寺や東大寺の大伽藍より高くもう屋根瓦を葺いていた。その大伽藍の北側には西寺塔頭建造現場があったが、もう一年も経つのに大安寺の筆頭塔頭だけはなんとか板張りだが屋根はあったが、残りの29寺院は柱だけで梁も屋根も手付かずだった。道慈は西寺塔頭建造責任者の明心に質問を浴びせていた。

道慈は明心に、

「もう一年も経つが何故工事が遅れているのか？」

「いえ、もう京の都の近辺の森では西寺東寺の工事の為に伐採する木がないのです。あるのは比叡山だけですが比叡山の木を伐採すれば確実に戦争になります」

「それなら丹波や奈良吉野の木材を買えばいいのでは？」

「それが当初見積もりの3倍から5倍になっています。それに瓦や石材、金具もです。材料が買えなければ寺はできません」

「そか、それなら各本山に金を送ってもらえばいいが...?」

「もちろんですが、どの本山の財政部は聞く耳を持ちません。一年分の予算は約350名の僧侶の米や食材に消えますからなんの為にここにいるのかわかりません」

道慈は明心にそれなら改めて現在の塔頭建造の見積もりを作って私のところに提出せよと言い残して奈良に帰られた。そこで明心は僧侶350名に工期5年間としての塔頭30寺の建造費用及び僧侶の米と食材などの必要経費などのすべてを計上した見積書を作るように命令していた。

木材は3倍～5倍と高値安定していたが、三十数万枚も使う屋根瓦は東山の粘土と登り窯で作るが、窯で使う薪は鴨川左岸から東山の麓に広がる雑木林の松などを使っていたがもうすべて使われて広大な更地になりここを耕す農民も増えてきた。都で薪になる雑木林はもう比叡山の麓にしかなかった。したがって瓦は三河国か淡路島から買わなければならないが、この瓦の価格の調査をするために明心は三河国と淡路島に僧侶を10名派遣していた。

明心はこれらの資材不足と資材の高騰の原因の行き着く先は必ず比叡山に突き当たる、比叡山には木材も薪も余すほど豊富にあるし、その木材も薪も麓の高野川から鴨川へ流せば半日で東寺にも東山の瓦を焼く登り窯に運べると考えたが、これらは偶然ではなく誰かが奈良仏教を陥れた罫ではないかと考えるようになっていた。

そこで明心は西寺総造寺司の守敏僧都に面会を求めていた。明心は「源光寺の変」で守敏僧都に命を助けてもらった恩義があるのもあるが、それから人間守敏を知り師と仰いでいた。明心は守敏僧都に、

「守敏さま、私はこの西寺の塔頭建造の件はなにかと符に落ちません。私も守敏僧都も奈良仏教には不信をもってはいますが、だからといって奈良仏教が破滅になるのは希望していません」

「それは私もそうだが、奈良仏教は権力と財力を持ち過ぎたからそれを弱めようと桓武天皇は奈良から都を京の都に遷都された」

「そ、そのことを守敏僧都は最初から知っておられたのですか?」

「いやいや、私もお主と同じように奈良仏教の敵は稲荷神社だと思い武器を持って僧兵を出陣させたが、稲荷神社の宮司の伊呂具に説得させられた」

「そ、それは私が守敏僧都を殺そうと思ったが説得されたのと同じになる...」

「そう、最初の東大寺寺領(荘園)からの農民集団大移民から西寺塔頭の資材高騰まですべては一本の糸で繋がっているが、この糸は桓武天皇亡き後も平城天皇即位後もまだ切れてはいない」

「私たちは見えない糸に操られているのか?守敏殿?」

「明心がそう思うならそう思ってもいい。だが私はそれも含めて歴史を自分の手で作っていると思っているが、その評価は未来の日本人がする」

「そうですか...私も今日のことは忘れて任務に励みます」

薬子は学者の家系の従三位藤原宗茂を参議に引き上げ奈良仏教系貴族の強化を図っていた。桓武天皇の時には比叡山系が約六割で奈良仏教系は約四割だったが、これが五分五分の勢力にはなかったが、天皇を決めるのは貴族の数ではなく皇室の血筋で決められるから、薬子の力ではどうすることもできなかった。ただ、天皇に近づき天皇を操るのは薬子がいい見本になる。

ただ、この時代は天皇を退いても上皇として政治には関与できるし上皇として命令を発することも出来た。つまり、二人の天皇の意見が違ったらどちらに付くかは貴族が判断できるから貴族を多く取り込んだ天皇、上皇の意見が反映される場合があるがこれが醜い権力争いから武器を使った戦争にもしばしなっていた。

薬子は考えていた、このまま病弱な平城天皇が亡くなり皇太子の源神野が天皇になればもう薬子の野望は果たせなくなる。そこで平城天皇を早く引退させて上皇になれば薬子はそのまま上皇第二夫人としての身分は保証された上に権力をほしいままに出来るという結論になった。そして天皇の政策にことごとく反対して奈良仏教系の貴族の力で天皇を引退させてその次の天皇には源神野の腹違いの弟の伊予親王を擁立すると決めていた。そのために伊予親王に近い藤原宗茂を参議に引き上げていた。

小説西寺物語 18話 807年空海真言宗を立ち上げる

平城天皇が天皇に即位して半年後の807年1月中旬のころ朝廷内では20年間の予定で唐国に留学していた最澄と空海が第19次遣唐船の帰りの船に乗っているという噂が流れた。その噂の出どころは遣唐船が対馬沖で嵐にあい第三船と第四船の二隻が難破したが、その難破した第四船の乗組員が板切れに掴まって3日ほど漂流していたが、対馬の漁船に救助されて助かっていた。

その乗組員が遭難の事件を難波港の遣唐船事務所に知らせようと対馬から下関、下関から瀬戸内の漁船に乗り継いで帰ってきたという。その遭難の事実を難波の役人が朝廷に手紙で知らせたが、この手紙には比叡山の高僧2名は遭難していない第一船、第二船に乗っていたという記述があったからだ。これより先に第19次遣唐船の遣唐大使の従三位藤原広活を平城天皇の勅使として唐国にいる最澄、空海に対して20年以内の帰国は許可しない、もし日本に帰ってきた場合は両名の官位を剥奪した上に最澄を5年間比叡山に幽閉、空海は太宰府の観世音寺に5年間幽閉という重い処罰を申し渡していたが、それを無視して日本に帰ってくるという。

これを察知した薬子は太宰府の長官の従三位藤原常嗣に平城天皇の命令として空海を5年間太宰府の観世音寺に幽閉するようにと手紙を送っていた。さらに難波港の貿易事務所の所長には最澄上陸後はただちに比叡山まで役人が監視して送り届けることを平城天皇の命令としていた。さらに薬子はこれら最澄と空海に入れ知恵している稲荷神社の加持祈祷師の伊呂具の動きを封鎖する良い方法はないかと、奈良仏教系貴族の従三位藤原宗茂に相談していたが、宗茂は、「稲荷神社の宮司には官位もありません。それに公卿や貴族からの寄進、寄付もありません。つまり、完全民営のために朝廷としては口も手も出せません」

その稲荷神社の伊呂具にも最澄、空海が日本に向かっている情報は届いていたが、これは最澄、空海らの元々の計画だった。この計画を官営西寺東寺造寺司の守敏僧都は知っていたのか、知らなかったは不明だが、807年2月1日付で東寺塔頭30ヶ寺の建立を認めていた。これは今まで塔頭の建立を認めていなかった訳ではないが、東寺の官主に内定していた空海が日本にいなかったために工事の着工の許可を出すのを忘れていたためで何ら意図はないと朝廷に説明をしていた。

この話しは奈良仏教はもちろん比叡山で20年間の予定で修行している比叡山の1000名の修行僧にもその日内に伝わり修行僧は一斉に歓声を挙げていた。この1000名の修行僧は日々の修行の他に比叡山にある樹齢500～900年の檜や杉を伐採して乾燥させ柱や板に加工して備蓄していた。さらに30万枚の瓦を焼く登り窯で使う薪なども大量に備蓄していた。これは空海が官営東寺の官主になれば当然必要になる東寺境内の30ヶ寺の塔頭の木材になる用意を修行僧はこれも大事な修行

として空海から命じられていたからだ。

一方の奈良仏教の西寺塔頭建造工事の再見積もりを作成していた西寺塔頭建造責任者の明心は次々報告されてくる見積もり価格の金額に愕然としていた。たとえば瓦は当初の東山の瓦では一枚30文で30万枚とすれば9000貫(銭1000文で1貫)だったが、淡路島産では一枚90文もする。これは淡路島から船で難破港まで運び、ここから小さな船に積み替えて淀川を上ぼり、山崎港から陸路西寺までの輸送費用がかかり総額2万7000貫という。木材は丹波の山で伐採されて保津峡から嵐山、そして三条通りの運河から都の中心朱雀大路三条に運ばれるが、この木材の間屋価格も当初予算の5倍にもなっていた。

さらに宮大工の建設費用も西寺塔頭の再工事と同時に建造されるために宮大工不足からくる値上げでこれも倍にもなった。明心はこれらの見積もり合計を60万貫としたが、この見積もり書を持って奈良仏教代表の道慈に会うのは心苦しいと思ってはいたが、やむを得ず明心は大安寺に向かった。道慈はその見積もり書を見ていたが、さほど顔色を変えずに、明心に、「ご苦労さま、随分高いが、これで進めてほしい」と道慈はいうが、明心は、「あの～六万貫ではなく～………」と、口を濁していると、道慈ももう一度見積もり書を見て、絶句していた。

この明心が積算した西寺塔頭の見積もり60万貫に仰天して奈良仏教六宗派七大寺院の幹部会が緊急に開催されて明心も強制参加させられていた。代表の道慈は明心になんとか安くする方法はないのか?、明心は、「安くなる方法は4つあります。まず一つ目は、奈良で保管している元平城京の宮殿、その関連施設、公卿や貴族の屋敷を解体してそれを塔頭に転用すれば建設費は半分になります」

これについては、「解体すれば奈良に都を遷都なされようとしている平城天皇の宮殿や皇族の屋敷がなくなることになるので反対とされた」

明心の二つ目は、「西寺塔頭予定30ヶ寺を半分にすれば建設費は半分になります」

これについては、「残りの塔頭15ヶ寺に比叡山が入れば西寺まで比叡山に取られて奈良仏教は地方の一宗派になるから反対とされた」

三つ目は、

「寺領(荘園)の年貢を5割から7割5分にすれば5年で塔頭建設費は半分になります。または平城天皇に寺領を現在の1、5倍にしてもらえば5年で建設費は半分になります」

これについては、七名の幹部からはなんら意見が出なかったので明心は最後の四つ目の提案をしていた。それは、

「奈良仏教が今までに貯め込んだ金、銀、財宝などが推定120万貫あります。これの半分以上を塔頭建

設費に回せはすべて解決いたします。塔頭が建設された暁には京の都で積極的な布教活動をすればまた金や銀は貯まります」

これに対して道慈が、

「お主...いつから守敏僧都や稻荷神社の手先になった」

「いやいや、私は道慈さまから塔頭の見積もり依頼を頼まれただけでこの件を誰かに相談したことはありません」

明心はこの夜から大安寺で足止めされて奈良仏教の結論を待っていたが、京と連絡のやり取りをしているのかももう5日も経つが返事がないので明心は都に帰ろうと身支度をしていた時に道慈から部屋に来るようという僧侶の使いがあった。

道慈は、

「平城天皇は都を京から奈良へ遷都される決意をなされました。したがって京の官営西寺東寺の工事を中止して今ある建造物は解体され奈良に運ばれることになった」

その上で、

「守敏僧都と明心は奈良仏教から破門する。そして西寺に派遣されている僧侶350名は即刻各本山に帰るように命じてある」

明心はやむを得ず京に帰るが、大和街道を上がる道筋では奈良に帰る僧侶とは一人も会わなかった。午後六時ごろ西寺の南大門から入り講堂前まで来ると守敏僧都がそこにいた。そして講堂の中に案内されるとそこには350名の僧侶の拍手が待っていた。

守敏は明心に

「空海宗祖が長崎の大宝寺で真言宗を立ち上げられました。三輪宗九州別格本山傘下の末寺125ヶ寺も三輪宗から改宗して真言宗の寺院になりました。私の源光寺も源氏さまの許可をもらって無宗派の寺から真言宗127番目の寺になりました。そしてここにいる奈良仏教の僧侶350名のすべてが改宗して源光寺の僧侶になるが、明心殿はいかがなされますか？」

明心はこの急劇な展開についてはいけず、ただただ涙して頷くだけだった。さらに、守敏僧都は、

「この西寺の塔頭跡地だが、この土地のすべてを皇太子の源神野さまから源光寺に寄贈されました。この土地には真言宗源光寺の末寺として30ヶ寺を建立いたします。そして30ヶ寺建造責任者には明心を任命いたします。さらに建造の木材や瓦は比叡山が調達してくれます。この官営西寺東寺の建造工事が中止になりましたが、これらに携わった多くの宮大工さんから西七条村、九条村からも無償の労役の申し入れがあります」

こうして官営西寺東寺の建造工事は平城天皇の手で中止させられたが、東寺の塔頭建造工事は空海が唐国から帰ったことから建造工事が始まり、源光寺の末寺の工事とともに西寺東寺とも工

事による活気は元に戻っていた。ただ、空海はこれから5年間は太宰府の観世音寺で幽閉されることになる。

小説西寺物語 19話 最澄罪人ながら凱旋門から入城、比叡山へ

空海を博多港で下ろした遣唐船第一船と第二船は瀬戸内海を難波港へと航行していたが、波風は安全とはいうものの岩礁がアチコチにあるために夜明けから日没までの航行しかできなかった。それに潮待ち風待ちで船内では最澄と太宰府での任期が終わって都に帰る高級貴族との顔合わせの宴会が連日開催されていた。

思えば奈良の平城京時代ではやはり奈良仏教の幹部らが連日連夜高級貴族との宴会で賄賂やコネ、人脈を活かして政治を奈良仏教の都合のいいように動かして来たからこそ奈良仏教は莫大な権力と富を貯め込んでいたが、稲荷神社の宮司の父親はこの奈良仏教と権力の癒着を指摘して奈良仏教の刺客に殺されている。このことがあって同じ平城京の従五位の役人だった息子の伊呂具も危険を感じて一族を連れて藤森神社に逃げて来ていた。

この藤森神社境内の北の端にある伊奈利山の小さな「藤社」という祠を藤森神社から借りて新興宗教の稲荷神社を立ち上げていた。最澄も奈良仏教の末寺に入門したが、伊呂具の父親と同じ理由で奈良仏教を批判して比叡山で新興宗教の天台宗を立ち上げていた。当時の平城京の天皇は桓武天皇で桓武天皇も奈良仏教の暴走(武器を持っての僧兵を組織して貴族を威嚇)をなんとかしたいと思い稲荷神社の伊呂具にこの問題の解決方法を加持祈祷で占ってほしいと密書を送っていた。

その伊呂具の加持祈祷の結果は奈良を捨てて京に都を遷都することだった。つまり、奈良仏教と奈良仏教系列高級貴族と分離することで奈良仏教の力を弱める大作戦だった。そして奈良仏教が僧兵を使って奈良から貴族に圧力をかけるが、この圧力に対抗するために最澄は比叡山に同じ戦力の僧兵を組織していた。最澄はこんなことを思い出しながら、賄賂もコネも人脈も肯定はしないが、民衆を救い幸せにするためには高級貴族に近付いて貴族を洗脳することも大事だと連日連夜の船の中での宴会を正当化していた。

807年1月1月21日に二隻の遣唐船は難波港に着いた。葉子の手配なのか都の役人30名が最澄を取り囲んで唐国から持ち帰った立体大曼荼羅や仏像、経典な仏具の明細書を第一船、第二船分受け取り数量を数えていた。それに盆栽47鉢も役人が数えていたので最澄は、

「いやいや、その盆栽は唐国からの僧侶大使の盆景和尚の私物なので没収は失礼になるが?」

「しかし、船長の積み荷の明細書には盆栽50鉢とあるが?」

「その50鉢は第三船、第四船に積まれていたものでもう海に沈んでしまった」

こんな会話を最澄と役人がしていると従三位の藤原弘成が、

「最澄さんが言う通りで朝廷が買った盆栽は海の中に沈んだ」と、言うだけで従八位から九位の

下級役人は「わかりました」と引き下がっていた。

朝廷が用意した荷車は100台でその荷車二台に盆栽47鉢が積まれて西国街道を都へと向かった。もちろん最澄も徒歩でその周りには役人が見張りをしていた。西国街道の都側の街道口からすぐに現在建造中の西寺、東寺の大伽藍の金堂や講堂が目に入る。最澄と空海が唐国から持ち帰った物はすべて東寺の講堂に一旦保管されることになっている。

その東寺の南大門の前の九条大路には空海ゆかりの九常寺がある。最澄は東寺の講堂に荷物が搬入される僅かな時間をこの九常寺で休憩をしたいと役人に申し入れるがその役人は弘成の顔を伺いながらも許可を出してくれた。その九常寺の住職の戒本に今日からこの盆景和尚を住職にする。戒本には東寺塔頭の責任者を任命していた。そして盆栽の47鉢を寺に搬入していた。唐国の盆栽が東寺の前の九常寺に到着したこの日が21日で次の2月21日には東寺の境内で初めての植木市と盆栽展が開催されているが、この21日の植木市はこれから1200年も続くことになる。

最澄は荷車一台分の私物を引く車夫2人の3名と役人30名に囲まれて羅城門(凱旋門)から朱雀大路を北に歩くが、その朱雀大路の両端には農民や商人が隙間もないほど並んで手には数珠を持ち頭を下げた拝んでくれている。その後ろには唐国への遣唐使の任務を終えた遣唐大使の弘成や学者、医師などの貴族約120名の隊列が天皇への帰国の挨拶のために宮殿に向かっていたが、都大路の両端で最澄に手を合わせていた農民や商人はこの帰国貴族の隊列にはなんら興味を示さなかった。そもそも罪人である最澄を先頭で歩かすのは朝廷に逆らったら逮捕されるという見せしめでこれを考えたのは薬子だった。

最澄が比叡山の京側の登山口の雲母坂に到着すると同時に大歓声が沸き起ったと同時に比叡山の頂上から麓の参道入口まで松明を持った1000名の僧侶が一斉に松明に火を点けて最澄の足元を照らした。この松明の火を見た貴族や農民、商人らが比叡山が燃えていると騒ぎだしたが、それが比叡山に最澄が帰って来た合図だとわかると奈良仏教系の貴族は不吉な予感を感じていた。最澄が羅城門から朱雀大路を北へ、宮殿前から雲母坂、比叡山までの五里を歩き民衆を動員して派手に松明を燃やして最澄ここにありと宣言したが、この演出は稻荷神社の伊呂具と空海がいつも使う手法の一つだった。

小説西寺物語 20話 即戦力になる奈良仏教の僧侶改宗大作戦

807年1月21日の深夜に比叡山に戻った最澄は1月22日から比叡山に籠もる20年間の修行の一旦停止を発表した。そして官営東寺の塔頭30ヶ寺と西寺塔頭30ヶ寺の建造を始める。東寺の貫主には空海が内定しているが、東寺は空海が立ち上げた「真言宗総本山」とする。西寺は奈良仏教が西寺から撤退したので塔頭の建造は比叡山仏教がする。西寺の貫主には守敏僧都が内定しているが、この守敏僧都は奈良仏教から破門されて現在は皇太子の源神野さまの源氏の菩提寺でこれも真言宗127番目の「真言宗源光寺」の住職になります。

現在官営西寺東寺の建造工事は平城天皇の命令で中止になってはいるが、いずれ復活して西寺東寺が完成すれば西寺は天台宗ということになり官営の日本を代表する東西の寺を比叡山が独占することになります。そのためには明日から東西の塔頭寺院が使う木材と屋根瓦の窯焼きに使う薪を比叡山から山出ししますのて手はずの通り塔頭建造工事の修行に比叡山全僧侶が励んで下さい。

この最澄の命令を受けてかねてから伐採されて乾燥や半加工された樹齢500～900年の杉、檜の木材が比叡山の麓の大原から高野川へ流された。流された木材や薪は鴨川から九条大路の浜に流れ着きそこで僧侶の手で木材は右岸の木材集積場に薪は左岸の薪集積場に山積みされた。この浜から西寺東寺まで僅か1キロ、東山の釜まではすぐで西寺東寺の60万枚の瓦を焼く予定だったが、この計画を決めたのは最澄、空海が唐国への出発前で稲荷神社の伊呂具の加持祈祷のお告げと歴史上はしているが、この3人の文殊の知恵だった。

この最澄が奈良仏教が官営西寺及び塔頭の30ヶ寺の建造を放棄したためにやむを得ず比叡山が西寺の塔頭までも建立するといったが、奈良仏教系貴族の従三位の藤原宗茂は平城天皇の第一夫人(愛妾)の薬子に、

「比叡山が西寺までも手に入れようとして西寺の塔頭建造工事のための木材を比叡山から西寺に運び入れています」

「それはほっといてもいい、いずれ平城天皇は奈良に都を遷都されます。そうなれば官営西寺も東寺も解体されて奈良で建立されます」

「しかし、いずれでは西寺も東寺も完成して都中が空海の真言宗、最澄の天台宗になります」

「だから、天皇は奈良仏教六大宗派七大寺院に都での布教を許された」

「しかし、奈良仏教からの誰一人の僧侶も布教には成功していません。なんでも九州では奈良仏教455ヶ寺の内もう半数の寺が改宗して空海の真言宗になったそうです」

「それならなぜ?奈良仏教は比叡山に布教で負けているのか?」

「そ、それは...最澄が比叡山に山に帰ってからは比叡山の僧侶1000名が下山して布教をしていま

すが、奈良仏教の僧侶を見つけては禅問答を仕掛けていずれも奈良仏教が負けて反対に奈良の僧侶が比叡山に改宗しています。だから布教に来ないのではなく比叡山に布教されに来るのです」

「しかし、奈良仏教は新興宗教の比叡山からすれば歴史があるのになぜ？」

「そ、それは...比叡山の僧侶と言うだけで農民から慕われ何処で会っても農民から拝まれます。反対に奈良仏教の僧侶は農民からすれば先祖代々苦しめられた奈良の僧侶になります」

元々源光寺の住職の守敏僧都も西寺塔頭建造責任者の明心、それに真言宗源光寺の僧侶180名も奈良仏教所属の僧侶で今回の西寺塔頭建造に奈良仏教から派遣され真言宗に改宗した僧侶350名も奈良仏教の僧侶になる。つまり、本来桓武天皇から奈良仏教にあてがわれた西寺だからこれら530名の僧侶らが建造しなけりばならないのにすべて奈良仏教から破門されている。

奈良仏教の七大寺院で修行している2500名の僧侶の5分の一の僧侶が比叡山に引き抜かれたことになるが、この元奈良仏教の僧侶が奈良仏教から都に布教に派遣された僧侶に接触して逆布教をする。これら僧侶同士は同じ寺で修行したり、また同じ村の出身だから話しが早い。そして彼らを源光寺に招待して奈良では幹部以外は絶対食べらない川薬(鴨鍋)や山薬(牡丹鍋)、それに般若湯(薬酒)を勧誘した修行僧と同じ部屋で和気あいあいと接待していた。

この奈良仏教の僧侶引き抜き大作戦の目的はもちろん奈良仏教の弱体化にもなるが、なにより僧侶を一人育てようと思えば比叡山で最低10年の修行が必要になるが、奈良仏教の僧侶も修行はそれなりに厳しく仏教の基本知識と読み書きはできるので即戦力になるからだ。最澄も空海も奈良仏教に代わり全国制覇を目指しているので僧侶の大量生産が必要になるが、奈良仏教の方から僧侶を都に大量に派遣するというより、奈良の僧侶自ら布教されに来る僧侶が増えて僧侶獲得目標の300名の確保に近付いてきた。

この空海が考えた僧侶引き抜きで使った買収の手法は唐国で習ったものでこれを悪い方に使うのは危険だが、奈良仏教から農民を開放して民衆を救い幸せにするために使うのは正義だと弟子に教えていた。これまで弟子のすべてを比叡山に閉じ込めてこれらの作戦には比叡山の僧侶はただの一人も参加せず最澄、空海も唐国にいた。つまり、今までの西寺物語の役者のすべては元奈良仏教の僧侶で占められていたが、その主役の守敏僧都はとっくに気が付いていたが空海の脚本通りに動いていた。

これら宗茂と薬子の会話の中にあつたすべてのことは奈良仏教にも届いて連日のように奈良仏教七大寺院の幹部が集まり会議をしているがなかなか結論が出なかった。奈良仏教の元代表の権操は、

「そもそも平城天皇がいずれ奈良に遷都されるというので西寺の塔頭建造を放棄したが、その「いずれ」はいつなのか?、その情報が正しかったのか?道慈殿」

道慈とは現在の奈良仏教の代表になる。道慈は、

「薬子さまからの情報ではいずれになるが、そもそも塔頭建造を放棄したのは権操さまで塔頭建造費用の60万貫は出せないというので塔頭を放棄したのです」

そんな中末席に居た僧侶が、

「もうこの同じ議論を連日していても奈良仏教から比叡山に改宗する僧侶は止まりません。ここはやはり都に奈良仏教の核がなければ平城天皇や薬子さまとも連絡が取れません。それにはやはり現在京の都にある官営の西寺を獲得することですが、これにはやはり西寺の塔頭を建造しなければなりません。そして西寺の貫主を奈良仏教から出さなければ奈良仏教は衰退します」

と意見を述べたのは奈良仏教の順位21番目の大安寺の順守だった。この順守は元大安寺の僧侶で今は西寺塔頭建造の責任者をしている明心の弟になる。本来なら末席に座っている僧侶は発言はできないが、もはや幹部からは意見が出ないのでやむなく意見を述べたが、代表の道慈は、順守に、

「順守は何か兄の明心から聞いているのか？」

「いえ、兄が西寺塔頭建造の見積り書を大安寺の道慈さまに提出した際に5日ほど寺に滞在した時に私の方から兄に会って色々話しをしました」

「それで明心はなんと？」

「兄は奈良仏教を守るためには60万貫でも100万貫でも出さなければ空海から奈良仏教を守れないと言っていました。私もそれに同意していますが、このままでは空海の思う壺になります」

もちろんここに居る奈良仏教幹部21名は順守とは同じ考えだが、これを言い出せなかった。結局もし60万貫だとすれば塔頭の数で頭割りすれば東大寺は八棟で16万貫、大安寺は七棟で14万貫、興福寺は三棟で6万貫だということになり、この交渉の責任者に順守が選ばれて守敏僧都と明心に交渉することになった。順守は、

「守敏僧都と明心、それに西寺建造に派遣した七大寺院の僧侶350名を破門したが、それはどうなされますか？」

道慈は、

「すべての破門を撤回して西寺の塔頭建造の任務にもどす」

「それなら明心に七大寺院からの拠出金60万貫の使い道を全面的に任せてても良いのですね？」

「その通りだが、お主には大安寺塔頭7ヶ寺院の筆頭塔頭寺院の住職に任命するが、兄の明心とともにこの歴史ある奈良仏教を守って頂きたい。そして任務遂行後は私の後(大安寺貫主)を継いでほしい」

こうして塔頭建造事件は奈良仏教側が全面的に負けたが、これは塔頭建造前に戻っただけで奈良仏教の代表の道慈は順守を大安寺の貫主に祭り上げて道慈自身は西寺の官主の座を狙っていた。

小説西寺物語 21話 奈良仏教稻荷神社の仲介で金銀三十万貫を比叡山へ

順守は奈良仏教からの全権委任大使として京の都の西寺を訪ねる途中、まだ建造中でその建設工事が中止されている東寺の前で南大門の後ろの金堂を見上げていた。それは東大寺や大安寺に匹敵する伽藍だが、東大寺や大安寺は300年ほどの年月をかけて築いて来た歴史があるが、この官営東寺の官主に内定している空海はまだ33歳でしかも奈良仏教から独立した最澄の新興宗派の天台宗からさらに独立して自らの真言宗を立ち上げたという空海に我が奈良仏教は翻弄されている。

その奈良仏教だが六宗派七大寺院はそれぞれ仏教思想を競い合うことはまったくない仲良し宗教集団に成り果てたということを今回の事件で順守は知った。そもそも奈良仏教の順位21番目の最下位の私が、それもその21番目の兄の明心が西寺塔頭建造責任者になり空席になったために私が幹部になった。そして兄は奈良仏教を破門されてその兄の破門を許すために私とその全権大使になったが、我々奈良仏教はお釈迦様ではなく空海の手の中で踊らされていると思うと順守は心底空海に恐怖を感じていた。

もう日は落ちかけていたが、順守は西寺の東門から入り兄の塔頭を探していた。食堂の真裏から南から北へと広い通路の左右に規則正しく15ヶ寺の塔頭の建造予定地はあるが、まだ屋根がある寺院は南端の寺院しか見当たらない。ここが兄の寺だと見当を付けて入ったが、見覚えがある僧侶が出て来た。兄の明心は源光寺で守敏僧都と会議中だというのでその僧侶に案内されて源光寺に行った。

兄の明心は順守の突然の訪問に驚いていたが、なにはともあれと守敏僧都に順守を合わせていたが、守敏は東大寺で順守は大安寺というので初顔合わせだった。順守はここで私は奈良仏教の全権大使として来たが、まずこれらの詳細は先に兄の明心に伝えたいと言葉を濁していた。明心は順守に、

「そか、それならその話しは私の塔頭で今夜聞くとして、まずは久し振りに飯を食べよう」

それを合図なのか僧侶5名ほどが湯気が沸き立つ大鍋を持って来た。守敏僧都は順守に、
「宗派は違って我々宗教者は民衆を救い幸せにする任務があるので比叡山とも奈良仏教とも、それに神教とも仲良くしたい」

順守は、

「その仲良くですが、官営の東寺を比叡山に西寺を奈良仏教が管理するのが一番の方法だと言うのが奈良仏教の結論になります。そのためには西寺の塔頭のすべてを奈良仏教に渡してほしいというのが私の願いです」

守敏僧都は、

「その話は明日にして今夜はこの山薬(牡丹鍋)と般若湯(僧侶専門の薬酒)を飲んでゆっくりして下さい」

「はい、ありがとうございます。それにしても守敏僧都も兄も奈良仏教から破門されたが、奈良仏教を恨んでいないのですか？」

兄は、

「いやいや、ここには奈良仏教から逃げてきた僧侶が188名、破門された僧侶が350名もいるが、宗派なんてものは所属を示す便宜上の仮の名前にしかない。我々は日本の仏教者で民衆を救い幸せにするのが任務になる」

「それなら兄はもし奈良仏教全権大使の私が奈良仏教からの破門を解除して西寺塔頭建造責任者を命じると言えば素直に従うのか？」

「おいおい、順守...それを言ったら明日の話の楽しみがないが、私も守敏僧都も奈良仏教を衰退させるつもりは微塵もない」

その明くる日にも守敏僧都と明心、それに順守の3人で西寺塔頭を奈良仏教に引き渡すための策を考えていた。順守が奈良仏教の全権大使で60万貫(銭1000枚で一貫)を西寺塔頭建設費用として拠出したことには守敏も明心も正直驚いていた。この60万貫の見積書を作成したのは明心だが、奈良仏教にとっては明心の推定では約120万貫を七大寺院で溜め込んだ金、銀の半分を出すことになる。つまり、明心が最初に提案した通りになったので順守は明心に、

「最初から兄さんの提案に賛成していれば奈良仏教の僧侶350名もの破門はなかったのに...」

「いや、それは奈良が私を破門して西寺に派遣されていた僧侶の引き上げを命じたが、誰一人も奈良に帰らなかったが、これが奈良の幹部には相当な衝撃を受けてこのままなら奈良の僧侶のすべてを比叡山に引き抜かれると思ったのが60万貫拠出の決心になったらしい？」

その60万貫の見積りは木材を丹波から運び、瓦は淡路島から運ぶための輸送費が相当掛かり木材と瓦で30万貫を計上していたか、その木材は比叡山の僧侶の手で伐採されてもう西寺に搬入されていた。瓦も瓦を焼く薪を比叡山から東山の登り窯に運ばれて30万枚の瓦を焼いていた。もちろんその木材と瓦を使えば5年の工期を2年に短縮できるが、比叡山はこの木材と瓦を売ってくれるかの心配があった。

そこで守敏僧都は比叡山で謹慎中の最澄との仲介を稲荷神社の伊呂具にしてもらおうと明心と順守を連れて稲荷神社に参拝をしていた。伊呂具はこの3人を温かく迎えていた。伊呂具は、

「亡き桓武天皇は巨大化した奈良仏教の横暴を押さえるために京に都を遷都され官営西寺東寺の塔頭に金を拠出させて財政的にも弱体化させようとされた。その結果奈良仏教は半分の資金を使うことになった。つまり、その60万貫の半分の見積り通りの30万貫を比叡山に木材と瓦の費用として払えば西寺塔頭の工期は5年が2年と短縮、比叡山は資金が入る。奈良仏教は京の都に進出で

きて衰退を食い止めることもできて三方両得になるが、いかがか?」

この伊呂具の提案は奈良仏教にとっては侮辱以外の何ものではなかった。それは奈良仏教が何百年もかけて蓄えてきた金、銀の半分を天敵の比叡山に渡すことを奈良仏教の幹部は理解出来るかの心配が明心、順守にもあった。明心は伊呂具に、

「それはたしかに木材と瓦の予算だから、これらに30万貫を使うのはなにも問題はないが...」

「たしかに、気分感情的には人間というのはそういうものだが、ところでその60万貫はいつ京の都に届く?」

「それは塔頭建造の目処がたてば一括で60万貫に相当する金、銀が送られてきます」

「そか、それならまずは金を明心が受け取ってから一気に建設工事を進めればいい。塔頭が完成すればもう木材や瓦をどこから買ったかは問題にしない」

そこで順守が、

「兄さん、私は奈良仏教の全権大使として金の使い道のすべてを奈良に報告する義務がありますが、木材は近江屋木材店、瓦は東山瓦店から買ったと報告します」

そこで伊呂具が、

「目的は塔頭の建造で木材が丹波産であろうと比叡山産であろうとそもそもそんな問題を先に提起すれば塔頭は生涯建造できない、今は60万貫が無事京の都に届くために力を尽くそう」

小説西寺物語 22話 西寺東寺塔頭60ヶ寺建造工事着工へ

明心は改めて官営西寺塔頭建造建設工事の見積り書を作っていた。それによると金額は当初見積り通りの60万貫になります。しかし、当初工期を5年としていたが、これは木材の原木を丹波から大井川、保津峡、嵐山へと流して陸揚げまでの時間とさらに木材を乾燥させるために3年ほどかかるためだが、新たに近江屋木材に見積り依頼したところすでに乾燥した木材が大量にあり、すぐに板、柱に加工できるために工期がその分早くなる。屋根瓦についても当初は淡路島から海上輸送で2年の予定だったが、これも東山瓦店から購入することで工期が短縮できます。

さらに現在官営西寺東寺の建設工事が中止されているために宮大工を西寺塔頭のために数百名押さえています。奈良からの返事が遅れますと次なる寺院の建設工事に取りられてしまいます。次なる建造寺院とは征夷大將軍正二位坂上田村麻呂さまが寄進されます「清水寺」になります。この清水寺の建設が始まりますと京の都の宮大工、木材、瓦のすべてが取られます。さすれば西寺塔頭建造はかなり難しく予定がまったく立たなくなります。

一方の東寺塔頭建造建設工事はもう木材も瓦も現場に到着しています、これに遅れを取らないようにこの見積り書が届くと同時に建造費の60万貫を西寺に輸送していただくことをお願いいたします。この見積り書を弟の順守に託してその場から奈良へと走らせた。順守は大安寺の貫主に渡してすぐに奈良仏教の幹部会が招集された。

この幹部会に順守も参加するが、いつもの末席ではなく道慈の横に座らせている。これは幹部の質問に答えるためだが、質問らしき質問はなく。もう、60万貫分の金銀の手配は終わっていたのか、明日の早朝に60万貫は二台の荷車に分散して運ぶ手配になった。これには僧兵50名の警備を付けていたので京の都までわずか10里だが、沿道には農民らが集まりこの60万貫を見送っていた。

60万貫もの大金を積んだ二台の荷車は順守を先頭に奈良街道から大和街道に入っていた。順守は歩きながら、昨日の幹部会を思い出していた。奈良仏教代表の道慈も前代表の権操も70歳を過ぎている。一寺院から3名の幹部が選ばれるが、すべて年功序列の年寄りばかりで私はたまたま大安寺の幹部が次々亡くなり30代で末席の幹部になった。こうして奈良仏教の全権大使にはなったが、それは奈良と京の都をもはや歩けない老人ばかりで歩ける幹部では私の他にはなかったからだ。

この幹部会の下の中堅は次の幹部を狙う中年だが、これらも幹部の顔色ばかりを伺うゴマすり集団にしかならない。その下の若手には改革派で老害に批判的な僧侶もいたが、それらはすべて

九州や東北に飛ばされている。今回の西寺塔頭建造工事の派遣僧侶に選ばれた350名は各寺院の若手から選ばれた僧侶でいわば奈良仏教の将来を担う僧侶になるが、その僧侶のすべてを守敏僧侶憎しで破門してしまった。これで奈良に残る僧侶は中年以上かまだ未成年の見習い僧侶しかいない。

いわば奈良仏教で修行させてやっと一人前にした僧侶350名を比叡山に連れてやったのと同じになる。幸い私がこれらの破門を助けたが、もし奈良仏教が60万貫を出さなかったら奈良仏教は空海に一気に潰されたと思うと背筋が寒くなるほど奈良仏教の無知無能の歴史が順守には怖かった。しかし、この60万貫で西寺塔頭を建造したとしても今の奈良仏教の幹部の知能では空海の真言宗全国制覇は阻止できないと順守は思っているが、さりてと守敏僧都や兄の明心のように空海を認めることはできなかった。

順守の隊列は稲荷神社の参道の入口で西寺塔頭建造の僧侶だと思われる50名に60万貫が積まれた荷車の引き渡し式をしていた。西寺側からは明心が参加して立会人は稲荷神社の伊呂具で順守は明心に60万貫を引き渡していた。そこで順守ら僧兵は奈良へ帰り、明心ら僧侶50名は二台の荷車を引いて西寺に帰ったが、大和街道九条から一台は西へ、もう一台は大和街道を北へと向かっていた。この一台を引いていたのが比叡山の僧侶で30万貫は比叡山に納められていた。

こうして官営西寺東寺の塔頭60ヶ寺院の建造工事は始まり完成は2年後の809年5月を目指していた。そして西寺塔頭30ヶ寺院各寺院の寺の名前と住職を明心が内定していたが、これらの住職のすべてが、若手で塔頭建造工事に携わった僧侶になるのは当然だが、この若手より僧歴も寺の順位も高い中堅僧侶がこの西寺塔頭住職の人事を認めないと各本山の貫主や幹部僧侶に詰め寄っていた。その理由が、そもそも西寺塔頭建造工事の責任者は明心だが、それは塔頭完成までのことで完成後の住職らの人事の決定権はないので明心の内定案は白紙撤回になった。

たしかにこれらの中堅幹部の言い分も分かる。若手の僧侶は宗派から派遣され任務を遂行しただけで、我々中堅幹部も奈良で与えられた任務を遂行してきた。たまたま仕事の違いだけで西寺塔頭の任務をしたからと言って若手がそのまま住職になるのは奈良仏教の慣例から考えても間違いだという。

僧侶の出世といえは宗派の本山の貫主になることだが、貫主になろうと思えばそれなりの別格本山や有力寺院の住職になってまず幹部にならなければならない。幹部の下の中堅はそれぞれ住職の集まりだが、住職といってもどこかの田舎の山寺から都で公卿や貴族の菩提寺もあり貧富の差は激しい。そこにいくと京の都の官営西寺の塔頭の住職となると公卿や貴族の菩提寺になり大商人の檀家も期待できるので中堅住職は若手に今の寺を譲って都に進出したいと思うのは誰でも同じになる。この下に寺を持たない本山の修行僧がいるが、これは所属している宗派が大きく発展して寺が増えれば住職も増えることになる。

西寺の塔頭建造工事に赴任している僧侶350名はこの寺を持たない各本山の僧侶で塔頭が完成すれば明心の内定では30名の住職が誕生することになり、また住職になれなくても京の都に宗派の寺が増えれば必然的に住職にもなれる希望があった。だからこそ修行という名目で土方仕事までもこなしてきた。その西寺塔頭の住職と所属僧侶の座を奈良仏教の中堅僧侶が狙っていることに350名の僧侶はかなりの衝撃に打ちのめされていた。

小説西寺物語 23話 西寺建造僧侶350名の大ストライキ

守敏僧都は奈良仏教からの破門は回避されて一応奈良仏教所属の僧侶だが、真言宗源光寺の住職でこの寺で修行している僧侶188名(元奈良仏教の僧侶)と見習い修行僧78名は当然ながら比叡山真言宗の僧侶になる。この僧侶らは官営西寺東寺の建造工事の事務職員として朝廷から従十二位下の官位を賜った平安京の准公務員だったが、守敏が官位を剥奪された上に官営西寺東寺の建造工事が薬子から一時停止されて僧侶らも一時官位を停止されていた。

そして西寺塔頭建設工事が奈良仏教の手で始まった。これは官営西寺東寺が建立されてこそ塔頭の建設の意味があるが、この塔頭建設工事でも寺院が完成すれば奈良仏教幹部が30寺院の住職になると告知されてからは350名の僧侶の全員が現場に来なかった。現場には宮大工や瓦職人など500~1000人も働いてはいるが、これら現場の僧侶がいなければ木材や瓦、石材、建設金物の発注、建具の発注、月々の支払い、各専門職人らの予定作業の調整、人足、人夫の手配までの現場事務等々がまったく出来なくなりある工区の宮大工の親方は段取りが悪いと怒って仕事にこなくなっていた。

塔頭建設責任者の明心はこれらの塔頭建設にはなんら関係のない守敏僧都に相談したが、奈良仏教の人間性を知り尽くしているのか、かなり高度な悪知恵を伝授されていた。そして明心も現場に来なくなった僧侶の気持ち痛いほど分かるから西寺宿坊まで出向いて僧侶に出勤命令することもしなかった。そもそもこの僧侶350名を破門したのは奈良仏教であって一時は源光寺の僧侶になったが、これも比叡山から木材を調達する条件の一つにこの350名の僧侶の破門を撤回することもあった。

もし破門していれば奈良仏教で修行した若手僧侶をただで比叡山にくれてやったのと同じになる。明心は奈良仏教の代表の恵慈に奈良仏教の中堅幹部が西寺の塔頭の住職になるなら現在西寺塔頭建設工事に赴任している僧侶の350名から真言宗への改宗の願いが出ております。さすれば塔頭建設工事の現場事務僧侶350名を至急に選り赴任させていただきたい。という手紙を出していた。また、弟の順守にも守敏僧都からの悪知恵の仕掛けを手紙に書いていた。

明心からの手紙が届くと例によって奈良仏教の幹部会が大安寺で開催されていた。末席幹部の明心だが、この西寺塔頭建設の件では責任者として奈良仏教代表の恵慈の横に座らされていた。そして議題の中堅幹部の内、すでに筆頭塔頭の住職に内定している明心と順守を除く28ヶ寺院の奈良仏教幹部が内定した住職の28名が出席している。

もうすでに明心からの手紙は回し読みされているのか恵慈からの説明はなかった。そこで順守

は住職に内定している中堅幹部に説明している。それは、

「塔頭が完成するのは2年先になるが、現在、塔頭寺院への公卿や貴族、有力商人から檀家になりたいという申入れはただの一件もありません。また、洛中、洛外の村からも僧侶を派遣してほしいという末寺の申入れもありません。したがって各塔頭の住職に内定している中堅幹部の皆様はご自身で布教しなければ寺には一文の収入もありませんが、それでも現在の寺から西寺塔頭の住職になれるのですね...?」

そこで住職に内定している僧侶が、

「いや、それはおかしい、そもそも奈良仏教から西寺塔頭に派遣している350名の僧侶の任務には奈良仏教の布教という大事な任務があるが、それをしないのか?」

「もちろんそれが奈良仏教発展の第一番になります。しかし、それもやっと塔頭建設の見込みがついた今からと思った時に今回の塔頭寺院の住職の内定があったが、自分が手がけている寺院の住職に誰になるかも分からないのに布教活動はしにくいものです。それに布教活動した僧侶が必ず塔頭寺院の任務になるのかの保証はどこにもありません」

「誰が住職になるか、どの僧侶を塔頭の僧侶にするかの人事権は各本山にあるので塔頭建設に携わっている若手僧侶には関係がない」

「たしかにそうです。それなら内定している住職の皆様は現在の寺を即刻若手に引き継ぎ、すぐにも西寺塔頭に入り、建設工事の陣頭指揮と布教をやって下さい。また、これから西寺塔頭に派遣する350名の若手僧侶の人選もして下さい。そうすれば2年後には奈良仏教が京の都で大きく発展いたします」

これらの中堅僧侶は奈良仏教の全国に広がる2500寺院のなかでも別格本山級や有名有力寺院の住職で大商人や商家、それに大規模な村を檀家に持ちかなり裕福な寺になる。この身分からさらに上は各宗派寺院の貫主になる。彼らが西寺塔頭の住職にこだわるのは官営西寺という日本国公認でこの寺を運営するのは官主と塔頭30ヶ寺院の住職になる。つまり、西寺は東寺より格が上で西寺の官主が日本国、天皇家の大僧正になり、日本一の高僧になる。

この日本一の高僧を目指そうと思えば守敏僧都(官主に内定)の次、もしくは守敏僧都が失脚すればこの塔頭の住職の誰かが西寺の官主に選ばれることになります。さらに、官主には従六位(県知事、国立大学総長級の待遇)の官位が慣例では授与される。そして塔頭の住職には従八位程度が授与されて貴族という名誉と少くない官位米(給金)が与えられます。

しかし、これらは奈良仏教しかなかった時代のことで公卿も貴族も大商人も奈良仏教のどこかの宗派、寺院を菩提寺にしなければならなかったので末寺でも寺の経営は裕福だった。ところが、比叡山仏教の天台宗、空海の真言宗が台頭してきた。それと桓武天皇が都を奈良仏教から遠ざけるために京に遷都されてからは貴族の多くが奈良仏教から離れて比叡山を信仰するようになっていきますから奈良仏教への公卿や貴族の布教は並大抵ではありません。

順守は京の都での奈良仏教の立場や西寺塔頭の官位などの待遇面までを包み隠さず塔頭住職に内定している中堅幹部に丁寧に説明をしていた。そして、

「西寺塔頭責任者の明心が作成した西寺塔頭の住職案がここにあります。もし本日の私の説明で住職の内定を取り消されたいと思った方の空いた寺院があれば明心の内定案の僧侶を住職にしたいが、これに意義はありますか？」

と中堅幹部の顔を見回したが、これには誰も答えず、代表の恵慈に順守は、
「これから2年間は歯を食いしばり公卿や貴族の皆様が奈良時代と同じように奈良仏教の檀家になるように布教できるのは塔頭工事に携わった僧侶しかできません。どうか兄が内定した僧侶を住職にしたいが、いかがですか？」

「そか、それなら奈良仏教が内定している住職が辞退した場合のみ明心が内定した僧侶をその寺院の住職にする」

こうして順守は中堅幹部が考える時間を10日間としてそれまでに住職を辞退するのか？、住職の決意を決めた場合は、現在の寺の跡継ぎを推薦する僧侶の名前、それに西寺塔頭に随行する僧侶約10名以上の僧侶名を順守に知らせるという順守の折衷案が幹部僧侶、中堅幹部僧侶の全員に了承されて幹部会は終了していた。その幹部会の結果を順守は兄の明心に手紙で知らせていた。